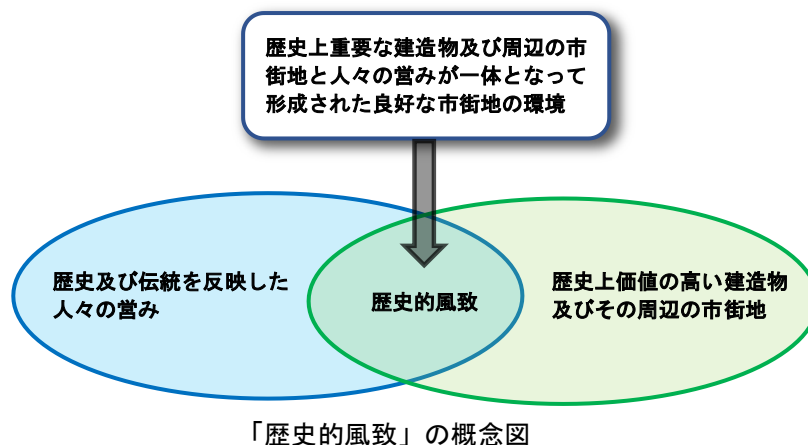


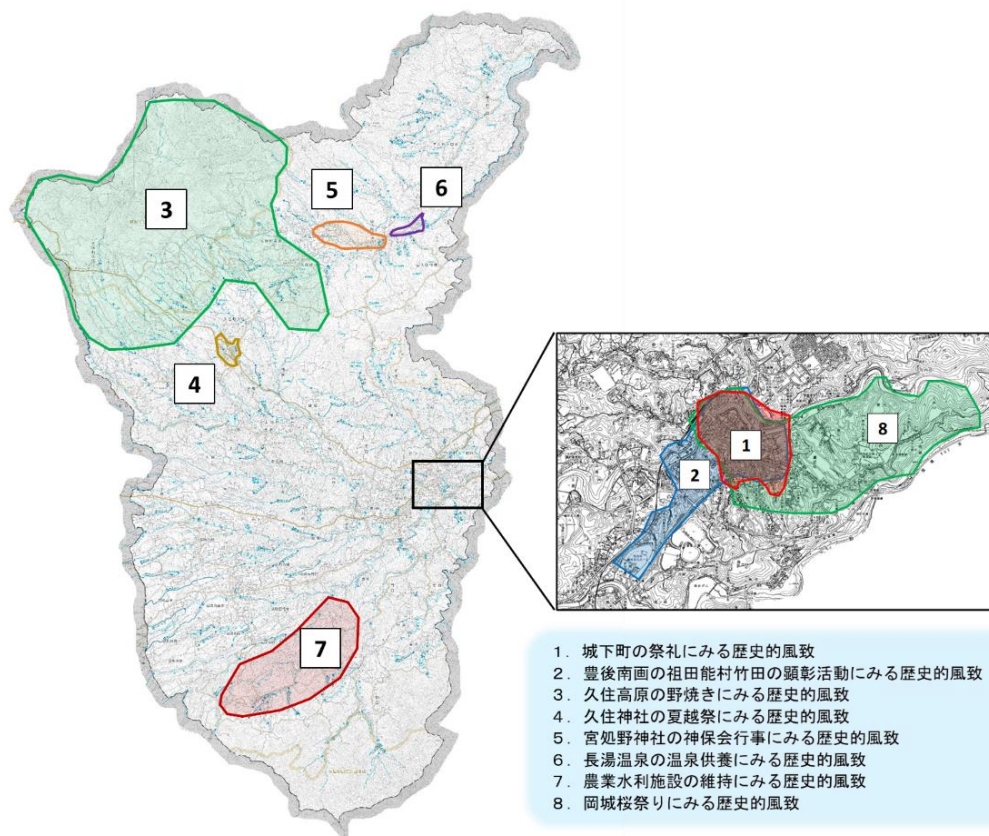
第2章 竹田市の維持向上すべき歴史的風致

1. 歴史的風致の分布状況

「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法第1条において「地域におけるその固有な歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地環境」と定義されている。



竹田市の維持向上すべき歴史的風致は、次のとおりである。



竹田市の歴史的風致位置図

2. 歴史的風致の内容

(1) 城下町の祭礼にみる歴史的風致

①はじめに

竹田市街地は、文禄3年(1594)に豊臣秀吉の命により、播州三木(兵庫県三木市)から竹田に入部した岡藩初代藩主中川秀成(在位1593~1612)により造られた城下町である。城下町の建設は、中川氏の入部当初から始まる。当時の城下町一帯は稲葉川右岸に広がる沼地で水田もなく民家が少々みられる程度であったと伝えられ、城下町建設のため沼地を埋め立て、玉来(城下町の南西約2km)と十川(中川氏入部以前の城下町)から町家に移転させ、碁盤目状に区画された町割りが造られた。その後、寛文4年(1664)に古町が造られ、江戸時代から現在に至るまで、この地域の経済活動の中心として発展した。

城下町と密接な関係のある史跡岡城跡は城下町の東側に500mほど離れた阿蘇溶結凝灰岩の台地上に築かれ、城と城下町は丘陵と谷により遮断されている。

岡城の築城は、文治元年(1185)の源平合戦で活躍した緒方三郎惟栄が源頼朝に追われ九州へ逃れようとした源義経を迎えるために設けたとされるが、今日の史跡岡城跡の前身となる城は、応安2年(1369)頃以降に志賀氏の居城として築城されたと考えられている。現存する岡城跡は、中世の山城であった志賀氏の居城段階の岡城を岡藩初代藩主中川秀成が藩領統治の拠点とし大々的に改修普請を行い、本丸・二の丸・三の丸からなる城の主郭部、城郭の西側に築かれた西の丸及び家老屋敷、東側に藩主の祖先を祀る^{びょうしよ}廟所のほか、大手門・近戸門・下原門・清水門の4つの門が設けられるなど、壮大な石垣が築かれた近世城郭と

して形が整えられた。明治維新後に城郭は取り壊され荒廃し、城下町で少年時代を過ごした瀧廉太郎の記憶に強く残り名曲「荒城の月」作曲のイメージとなった。

城下町は、武士の居住域である武家屋敷群、商人・職人の居住域である町家群、寺院が集中する区域から構成されており、武家屋敷群(向町・殿町・代官町・浦町)は城下町の東側を中心に城下町内の周辺地域との境界に配置され、西側の一



岡城古写真(明治初期)



史跡岡城跡三の丸付近

角に寺院群（寺町）が配置されている。これらの武家屋敷群と寺院群に囲まれた中央に町家群（本町・上町・新町・田町・府内町・古町）が配置され、この町割りや呼称は現在まで大きな変化もなく残されている。

城下町には市内最古の木造建築物である願成院本堂（重要文化財）、田能村竹田（豊後南画の祖）の生家である旧竹田荘（国指定の史跡）が現存する。岡藩主ゆかりの寺である西光寺境内（県指定史跡）は、安政5年（1858）建築の木造重層入母屋造、瓦棒形銅版葺の本堂（市指定有形文化財）、延宝8年（1680）の建築とされる木造切妻造、棧瓦葺の禅宗様の四脚門である山門（市指定有形文化財）、元禄4年（1691）建築の桁行梁行共に一間の木造入母屋造、袴腰付、本瓦葺の鐘楼（市指定有形文化財）及び中川家婦女子の墓から構成される。

その他、岡藩営の宿泊所として建築された御客屋敷（市指定史跡）や、中国風楼閣を模し『豊後国志』の編纂が行われた円通閣（市指定有形文化財）などの指定文化財がある。



西光寺本堂

また、登録有形文化財は塩屋土蔵、佐藤家住宅、吉川家住宅、竹田市公民館竹田分館旧一味楼、旧竹屋書店、塩屋旧大蔵が城下町内に存在し、江戸時代から昭和初期の古い建造物も数多く残され、城下町の風情を醸し出している。

この城郭と城下を舞台とし、夏越祭、八朔祭、善神王様祭、神明社大祭、恵比寿講などの祭礼が江戸時代より城下町の人々により現在もなお継承されている。

②建造物

○城原八幡社

本殿・申殿・拝殿・神楽殿（市有形文化財）

城原八幡社は、竹田市大字城原に所在する神社で、その由緒は『日本書紀』によると、景行天皇12年の熊襲征討の折、土蜘蛛の抵抗が強く一時城原に引き返し軍を整えたとあり、その行宮跡が城原八幡社上松原社地であるとされ、応神天皇2年（271）に行宮跡に一祠を造営して景行天皇の御神霊を齋奉ったことに始まるとされる。天安2年（858）に国司豊後守石川朝臣宗継が殿宇を造営し八幡神を相殿に配祀させた。以後城原八幡社と称するようになったと伝えられ、建久7年（1196）大友能直が城原八幡社を崇敬し豊後八幡7社の一つとされ、大友氏からの庇護を受ける。天正14年（1586）薩摩島津軍の豊後侵入の際、宮司日野品秀は八幡の神霊を産山村（熊本県産山村）の隠川へ奉安し、文禄3年（1594）中川秀成の豊後岡入部の時、神霊を産山から竹田町の勝山に遷座され岡の総鎮守とされ、勝山を八幡山と呼ぶようになった。慶長元年（1596）に神霊は八幡山から元の城原の地に遷座された。

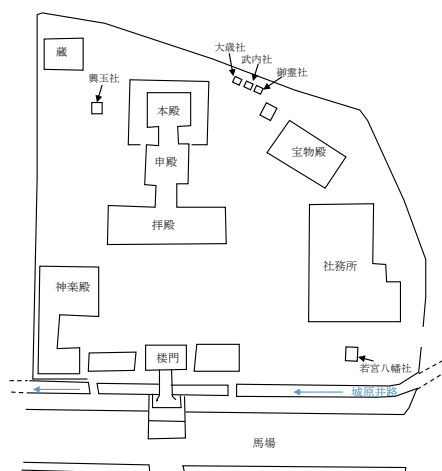


城原八幡社拝殿

現在残される城原八幡社は本殿・申殿・拝殿・神楽殿・楼門（楼門以外は市有形文化財）などがたち、豪壮な境内

である。本殿は棟札の記載から宝暦12年（1762）に建立された三間社流造、銅版葺、申殿は棟札の記載から宝暦12年（1762）に建立された正面3間、側面3間、入母屋造（正面軒唐破風付）、拝殿は棟札の記載から宝暦12年（1762）に建立された桁行7間、梁行2間、入母屋造の大型拝殿、神楽殿は3間半の入母屋造りで棟に嘉永6年（1853）建立の墨書きが見られる。

楼門は三間一戸の入母屋造であり、文久2年（1862）の棟札があるが平成2年（1990）に焼失し、その後復原されたものである。本殿・申殿・拝殿・神楽殿は市指定有形文化財に、社叢が市指定天然記念物に指定されている。



城原八幡社境内図

にしのみや ○西宮神社

西宮神社は城下町内の本町に鎮座する神社で、玉来から町屋を移し城下町建設を行った際、玉来から移動した商家が本町地区に多く住んでいたことから、玉来の鎮守である西宮神社を寛政9年(1797)に玉来の西宮神社を分霊して祀り、本町の鎮守としたのが始まりで、文化元年(1804)に祇園社と事代主神を祀る社を



西宮神社拝殿

合祀して現在地に遷座した。社殿は本殿・拝殿からなり本殿は3間社流造、^{ながれづくり}拝殿は桁行3間、梁行3間、入母屋造銅板葺で、明治時代の建築様式が各所でみられることから、明治時代の建立と考えられている。以前の社殿は西南戦争時に火災に遭い、その後改築されたと伝えられる。

○岡神社

岡神社は城下町内の田町に鎮座する神社で、明治41年に岡城内北ノ尾崎の愛宕社を現在地に遷座し、上田新府（上町・田町・新町・府内町の4組：現東部祭組合）で祀られていた祭神が合祀され祭神は14柱を数える。上田新府の住民が氏子となり岡神社と称するようになった。愛宕社の創建については『幕末維新时期撰定 中川氏御年譜』（江戸時代末期）の元和4年(1618)の記述に「愛宕社並ニ願成院ヲ、城山ノ北ノ尾崎ニ建立」と記されている。社殿は本殿・拝殿からなり、本殿は三間社流造銅板葺、拝殿は桁行3間、梁行2間、入母屋造棧瓦葺で、建立年代については不明であるが、岡城内の愛宕神社を移築したものであることから、少なくとも江戸時代後期の建立と考えられている。現在の岡神社には、社殿の瓦などに中川家の家紋である中川柏や中川轡の家紋が見られることから愛宕社の移築をうかがい知ることができる。



岡神社拝殿



岡神社竣工式典
(明治41年)

○神明社

神明社は城下町内の古町に鎮座する神社で、文禄3年（1594）に緒方原尻（豊後大野市緒方町）に鎮座する伊勢神宮分霊を奉安したのが始まりとされ、社殿は元文3年（1738）に造営され、寛保元年（1741）に岡藩主の祈願所となった。明治10年（1877）の西南戦争で社殿が焼失したが、翌年現在地に再建されたことが棟札からわかる。



神明社拝殿

社殿は本殿・拝殿からなり、本殿は1間の神明造銅板葺、拝殿は桁行3間、梁行2間、入母屋造棧瓦葺である。

○塩屋土蔵

主屋・中蔵・古蔵(国の登録有形文化財)

江戸期の商家建築の好事例である塩屋土蔵は主屋・中蔵・古蔵から構成され、主屋は棟札から元治2年（1865）の建築とわかり、構造は土蔵造^{どぞうづくり}棧瓦葺の二階建の妻入の建物で、屋根構造は正面入母屋造、背面切妻造となっている。1階の下屋^{げや}庇^{ひさし}は側面にも廻りこみ、要所に水切^{みづきり}庇付の小窓を配し、軒裏^{しゅくいぬり}まで漆喰塗とした重厚な造りとなっている。中蔵は、主屋の後方に建つ土蔵造の建物で、建築年代は江戸時代末、屋根は切妻造で棧瓦葺、平入の二階建土蔵であり、外壁は軒裏まで漆喰塗で2階の小窓には鉄格子がある。内部は桁行中央の漆喰壁で2分され、主屋側が座敷、残りが倉庫となっており、主屋と連続して商家の佇まいを構成している。古蔵は中蔵後方に建つ土蔵造の建物で、建築年代は江戸時代末、桁行7.5m、梁間5.9mの切妻造棧瓦葺の平入の二階建土蔵。外壁は漆喰塗で、軒裏から破風まで塗籠める。主屋側の1階戸口は漆喰扉を吊るが、周囲を鳥居型に縁取る。



塩屋土蔵主屋

○佐藤家住宅

主屋・旧店舗兼主屋・旧味噌蔵・土蔵(国の登録有形文化財)

佐藤家住宅は、主屋・旧店舗兼主屋・旧味噌蔵・土蔵から構成され、主屋は明治12年に建築された木造二階建、切妻造棧瓦葺の建物で、桁行9間、梁間5間の規模を測る。2階正面を漆喰塗とする規模の大きな町家である。旧店舗兼主屋は、明治12年に建築された桁行5間半、梁間5間半の木造二階建、切妻造棧瓦葺の建物。旧味噌蔵は、明治12年に建築された桁行3間半、梁間3間の木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物。

土蔵は、明治12年頃に建築された桁行3間、梁間2間半の土蔵造二階建、切妻造棧瓦葺の壁面を漆喰塗とする建物。



佐藤家住宅主屋

○吉川家住宅

主屋・土蔵・倉庫一・倉庫二・倉庫三(国の登録有形文化財)

吉川家住宅は、主屋・土蔵・倉庫一・倉庫二・倉庫三から構成され、主屋は大正10年(1921)に建築された、間口5間半の木造二階建、入母屋造棧瓦葺の建物で、1階に広い土間、2階に大広間を備える店舗兼住宅である。土蔵は、明治11年(1878)に建築された桁行3間半、梁間3間の土蔵造二階建、切妻造棧瓦葺の建物で、壁面を漆喰塗とする。倉庫一は、明治11年に建築された桁行8間、梁間4間の土蔵造二階建、切妻造棧瓦葺の建物で、かつては「酒造所」



吉川家住宅倉庫一

の酒蔵として使用されていた大規模な土蔵である。倉庫二は、倉庫一の背後に建つ木造二階建、棧瓦葺の建物で、内部は米を蒸すための「釜場」や「洗米所」、酒造り職人の「休憩所」として使用されていた。倉庫三は、木造二階建、切妻造棧瓦葺の建物で、「室(麴室)」と使用されていた。

○竹田市公民館竹田分館（旧一味楼）
（国の登録有形文化財）

竹田市公民館竹田分館旧一味楼は、大正2年（1913）頃に料亭一味楼として建築された入母屋造棧瓦葺、木造二階建の建物で、南寄りの西面に玄関、東面に倉庫が付設し、一階は南北に座敷が並び、二階は舞台を持つ大広間となっている。9間にも及ぶ杉丸太や桐などの良材を贅沢に使う料亭建築である。



竹田市公民館竹田分館旧一味楼

○旧竹屋書店
店舗兼主屋・土蔵（国の登録有形文化財）

旧竹屋書店は、店舗兼主屋と土蔵から構成され、店舗兼主屋は明治32年（1899）に建築された、間口11m、奥行13mの木造二階建、切妻造棧瓦葺の建物で、西正面に下屋を付ける。正面1階はガラス戸を立て込み開放的な造りであるが、他は漆喰仕上げの大壁となっている。土蔵は、明治中期建築の桁行5.2m、梁間3.7mの土蔵造平屋建、切妻造棧瓦葺の建物で、漆喰仕上げで鉢巻をまわし、北面に出入り口を穿つ。



旧竹屋書店店舗兼主屋

○塩屋旧大蔵
（国の登録有形文化財）

塩屋旧大蔵は、江戸末期の建築の土蔵造二階建、桁行が東西で少し異なる台形平面になる土蔵造二階建、切妻造棧瓦葺の建物で、壁は大壁とし漆喰で仕上げられている。



塩屋旧大蔵

○古田家中間長屋門

古田家中間長屋門は、弘化4年（1847）建築（棟札あり）の桁行19.56m 梁行3.96m、切妻造棧瓦葺の武家屋敷の長屋門である。



古田家中間長屋門

③活動

城下町（竹田町）の祭礼の構造は、各通りで形成される講組（班）^{みぞぐみ}、講組が集まり形成される小町組、小町組が集まり形成される町組（古町組、本町組、東部祭組合）により祭礼が執り行われている。講組では恵比寿講や野狐祭、小町組では夏越祭の子供神輿、町組は古町組の神明社大祭、本町組の西宮社の八朔祭、東部祭組合は岡神社の善神王様祭など町鎮守^{ちんじゅもり}の社の祭礼を執り行っている。城下町最大の祭である夏越祭は、町組が請町として行われている。

○夏越祭

岡城下町で行われる主要な祭りである夏越祭は、城原八幡社の神輿が城下町（竹田町）にある3社（西宮神社・岡神社・神明社）へ御神幸を行う祭りで「城原様のオクダリ（御下り）」と城下町に住む人々から呼ばれ親しまれている。「竹田奇聞」（昭和20年発行）によると、宝暦12年（1762）に下木の仮御殿（竹田市大字会々下木：現竹田駅裏）^{かりごてん}に八幡神の御神幸^{ごしんこう}を行ったのが夏越祭の始まりとされ、安永2年（1774）に仮御殿が焼失したため御神幸は中止され、城原において3日間の祭典を行う様に変更された。安永6年（1777）から旧に復し松原（竹田市大字城原）^{まつばら}へ御神幸が行われ、竹田町から囃子や段尻等の余興を催し、御供行列を行った。



昭和40年代の夏越祭での子供神輿



昭和29年の夏越祭の様子

明治3年（1870）に竹田町に悪疫が流行したため八幡神の神幸を願い、本町西宮神社へ御神幸が行われ、城下町3社（西宮神社・岡神社・神明社）へ御神幸を行う現在の夏越祭の原型となった。昭和60年頃までは7月21日～24日まで3泊4日で神輿が城下町3社にそれぞれ1泊ずつ泊り、期間中、城下町内を神輿のお練り（次の神社まで練り歩いて移動する）^{にわかしばい}が行われ、俄芝居、子供神輿の巡行、各

神社組（現祭組合）による屋台や壇尻^{だんじり}などが行われていた。現在は、日帰りの祭りに短縮され3社が年ごとに受持っている。

祭りは、城原八幡社で城原八幡社の関係者・城下町の各祭組合の役員が参列し、お迎え神事が挙行される。神事では宮司による祝詞とお祓いが行われ、祭神を神輿^{みこし}に遷す祝詞が行われ、白装束を身にまとった若衆が神輿を担ぎ、神輿が城原八幡社を御発ちし城下町まで御神幸する「オクダリ（御下り）」が行われる。かつては城原から城下町まで神輿を担いでいたが、現在は城下町の入り口まで神輿を自動車で運んでいる。城下町の入り口（竹田駅前）に到着後、神輿を先導する平田獅子により獅子が徐々に目覚める様子を舞う御立ち舞が行われ神幸行列が出発する。御神幸の行列は、各町の8基の神輿（子供神輿として子供が神輿を引く）が太鼓を「ドドンコ、ドンドン」と打ちながら、子供たちの「チョーサジャ」の元気な掛け声で御神幸行列を囃し立てて先導し、獅子、太鼓、六角、榊、城原八幡社の神輿3基の順で隊列を組み、城下町を廻る。神輿の御神幸時には沿道の参列者は神輿が巡ってくると両手を合わせ拝みながら神輿の下を潜り、無病息災を願う様子が御神幸ルート^{ひらたしし}の各所で見られる。また、各神社では平田獅子による勇壮な舞が行われる。

御神幸は竹田駅前を出発し、その年の受持ちの神社まで城下町を町廻りするが、道順は受持ちの神社により異なる。平成25年度の夏越祭のルートを例にすると、駅前を出発し古町から下本町へ、塩屋土蔵の前を通過後右折し中本町へ、旧竹屋書店先を左折し上町通りへ、吉川家住宅前を右折し上本町へ移動する。上本町では右手に旧竹田荘を見ながら直進すると西宮社へ到着し、休憩をする。西宮社を出発し上町新町・中本町へ移動し、旧竹屋書店の交差点を左折し、田町通りを直進する。佐藤家住宅前を通過し、岡神社へ到着する。岡神社を出発し、上町・田町・府内町を通過し、東本町から竹田市民館竹田分館



城原八幡社の御発ち



神輿の御神幸



神輿の下を潜る様子



獅子舞の奉納



神楽の奉納

(旧一味楼) 前を左折し、古町へ進み、神明社へ到着する道順で行われた。受持ちの神社へ到着後、神輿を納め、神事が行われ、神楽の奉納が行われる。



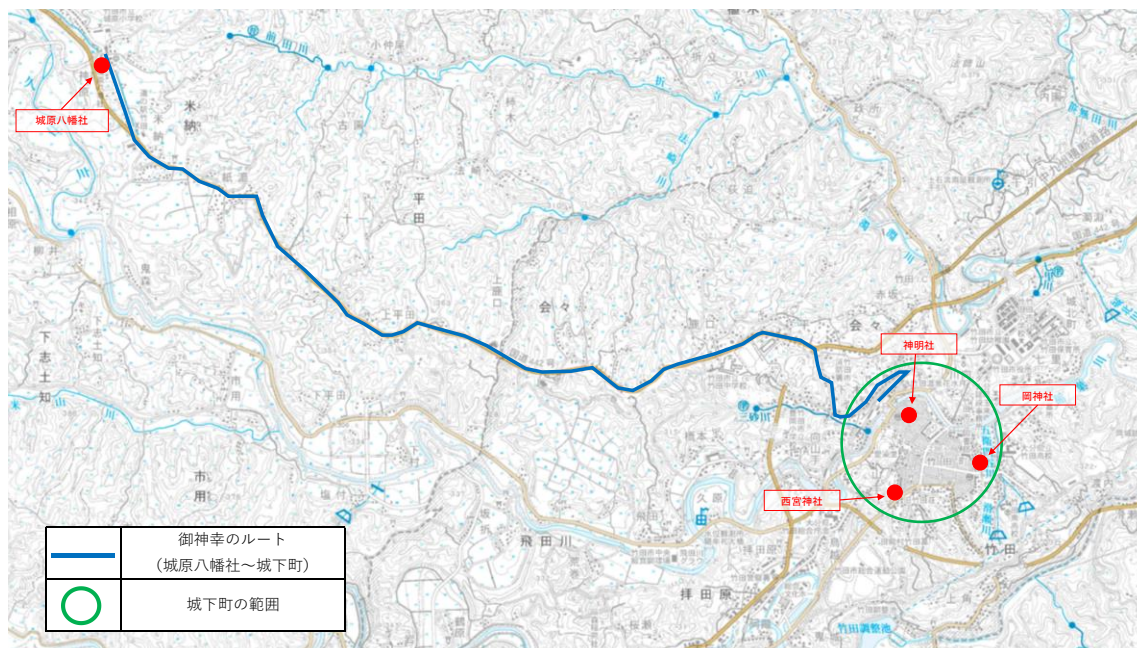
山車の巡行（左：東部祭組合 右：本町組）

翌日、再び神輿の御発ちを

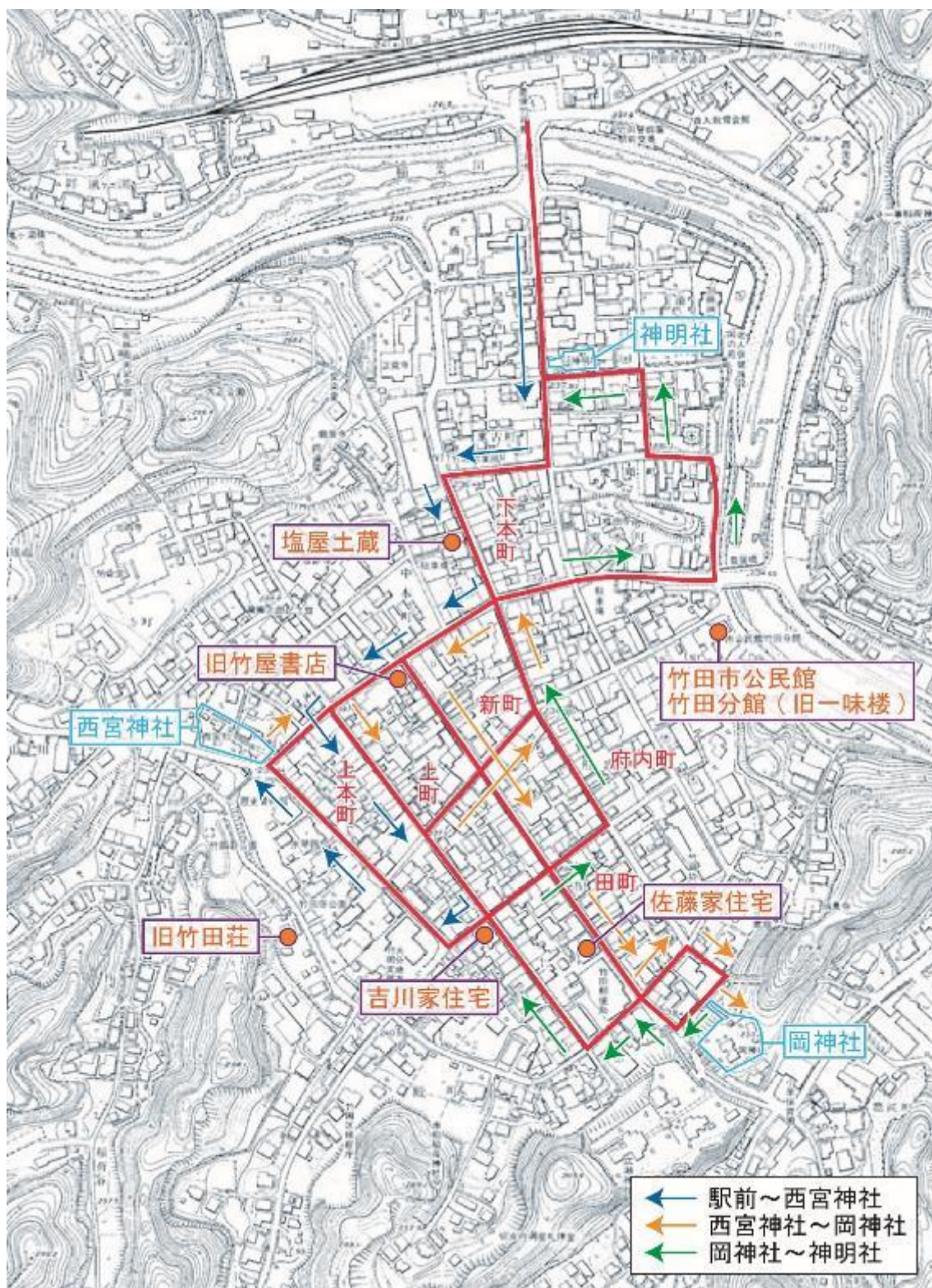
行い、神輿は城原八幡社へ「お帰り」が行われる。神輿の「お帰り」の後、各祭組合の山車の巡行が神輿の御神幸とほぼ同じルートで行われ祭りが終了する。

夏越祭りは、城下町から離れた場所にある城原八幡社が近世初頭に一時的に城下町に遷座された歴史的経緯から、城下町の町家の住民が氏子となり、城下町へ御神幸する祭りで、農村部の神社である城原八幡社を町部の住民が信仰するという極めて珍しい形態の祭事となったものである。城下町内の各町が共同で祭りを開催するだけでなく、農村部である城原地域との繋がりが見られ、夏越祭が城下町で開催される祭礼の中心となった。

城下町の住民から「城原様の御下り」と呼ばれ親しまれている夏越祭りは、城下町全町を舞台として行われる。城原八幡社において祭神を遷座した神輿を、城下町各町の氏子が行列を先導し、白装束の担ぎ手に担がれ城下町の3社を廻る神輿の賑やかな御神幸は、城下町の町家通りの中に違和感なく溶け込んだ夏越祭ならではの風致となっている。



夏越祭関連神社位置及び御神幸の道筋



夏越祭神輿御神幸ルート

○西宮神社の八朔祭^{はっさくまつり}

八朔祭の八朔は旧暦の8月1日（朔日）のことで、古来この時期は早稲の初穂が実る時期で、五穀豊穰を願う農耕儀礼の一つとして始まったものが、広まったものである。八朔祭りが行われる西宮神社は城下町西端の高台にある神社であり、八朔祭は、西宮神社の氏子である本町の住民により行われる祭りであり、商売繁盛・五穀豊穰・家内安全を願い、本町の各商店が商品や生活用品を使い、見立て細工を出し、別名本町祭りとも呼ばれている。

祭りは、本町組によりとりおこなわれる。

西宮神社で神社総代と本町組役員が拝殿に整列し、宮司の二拝二拍手一拝に合わせて参列者が拝を行い神事が始まる。宮司による祝詞奏上があり、次に参列者へのお祓いが行われる。次に神殿から神輿へ神を移す祝詞が行われる。次に宮司による玉串奉奠が行われ、参列者が総代から順に玉串を奉奠し、二拝二拍手一拝を行い神事が終了する。神事に続き、本町組氏子が神輿引き、八朔祭りの舞台である本町地域を静々と廻り、御仮屋（現在は城下町交流プラザ）まで御神幸する。御仮屋に到着後、御仮屋での神事が執り行われ、神楽や余興が行われ、御仮屋は勇壮な神楽の囃子や華やかな踊りの囃子と、それを見物する人々により賑やかになる。

明治44年(1911)の竹田小学校同窓月報「竹友」に「上本町の講談、中本町の浄瑠璃、下本町の軍談、鍛冶屋町の浄瑠璃なりき何れも人足を止めたるも下本町の久松梅玉^{ひさまつばいぎょく}の軍談は人気最も澤山」と八朔祭りでの余興の様子が記されている。現在では浄瑠璃や講談等の余興の名残として舞踊や太鼓などが行われる。夕刻なると氏子により神輿「御帰り」があり、西宮神社に神輿を納め、神事を行い、祭りが終了する。また、祭りでは各商店が商品や日用品を用いた見立て細工を作り、店先に並べ祭りの賑わい創出し、氏子や参列者が出来具合を批評したりする。



西宮神社



てみずば ふくや
手水場の覆屋（旧藩校由学館の門）



神輿御神幸



八朔祭神事

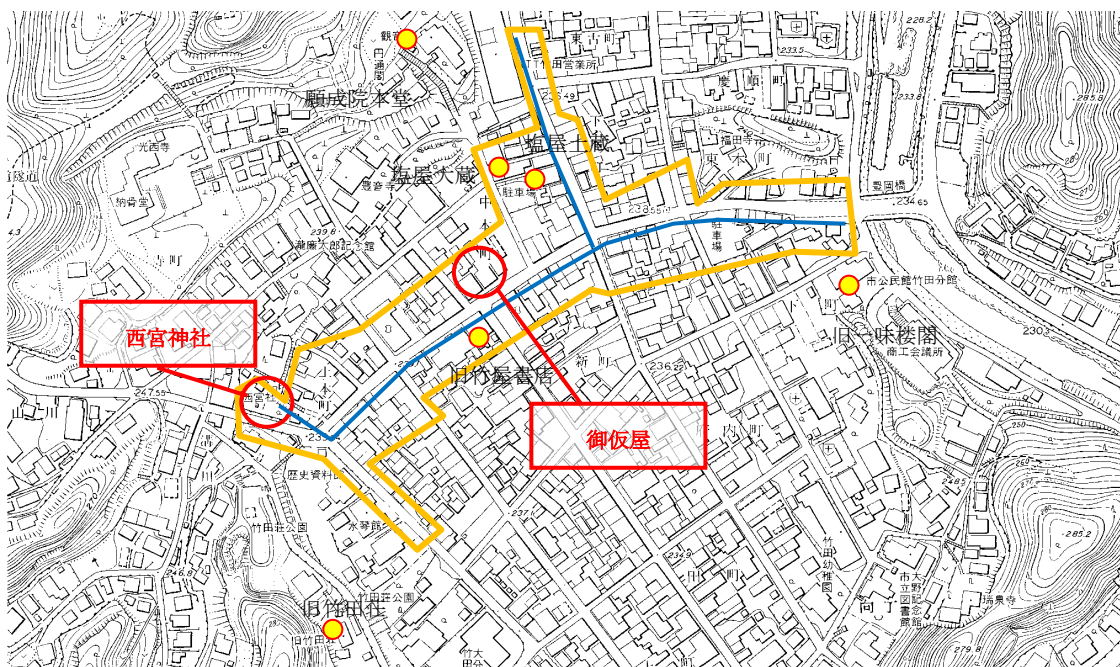
八朔祭が行われる本町は、旧竹屋書店（登録有形文化財）や塩屋土蔵（登録有形文化財）、等の城下町に残る歴史的に価値の高い町屋



各商店の店先にある見立て細工(ガール・タツ・スリッパ等を使用している)

が残されており、城下町を南北に横断するメイン通りとして繁栄した地区である。八朔祭は、神事を行い、町内を神輿の御神幸を行うことにより地区の氏神である西宮神社に本町地区の繁栄祈念する祭りである。また、御飯屋において行われる様々な催しや見立て細工は神への奉仕であるとともに、祭り見物に訪れる近隣の農村地域の人々への本町商店街の宣伝効果でもあったといえる。様々な催しにより人を集め、各商店は商品を材料とし見立て細工造り、店頭に掲げ商品の宣伝をする。近隣の農村地域の人々は八朔祭の賑わいを楽しみにしており、余興見物や買い物を行う。

八朔祭りは、本来宗教的な儀式であったが、見立て細工などによる商業的要素が加味された、商業地区である本町ならではの祭りであるといえ、城下町の中でも固有の歴史的風致を有しているといえる。



八朔祭神輿御神幸ルート

○岡神社の善神王様祭

城下町の東端の高台にある岡神社で開催される善神王祭で、善神王とは景行天皇から仁徳天皇まで5代の天皇に大臣として仕え、国政を補佐した人物である。当初は田町に善神王社があったため、上田組（上町・田町）の祭りであったが、明治41年（1908）に善神王社が岡神社へ合祀された後は、東部祭組合（上町・田町・新町・府内町）により岡神社周辺で開催する祭りとなっている。

善神王様祭は、本来旧暦の8月1日から11日間行われる旧善神王社の祭りを岡神社の祭りとしたもので、小松明（松明を灯し、並べたもの）が灯され、参詣者には甘茶が振舞われた。この祭りは、古くさかのぼれば、城下町が建設される以前の竹田村時代の風祭り（台風などの風害除けの祭り）と虫送り（農作物に付く害虫駆除を行い豊作祈願する祭り）であり、農村部における豊作祈願祭りであったが、城下町建設以降も善神王社の祭りとして残っていた。明治時代にこの地域の神社が合祀され岡神社となった際に、大祭として取り入れたものである。大正12年（1923）の「竹田小学同窓月報」によると、善神王様祭は「例年の通り九月十一日から二十一日まで十一日間岡神社で執行された」とあり、戦前は11日間行われていたようであるが、農業に関する祭りであったため、町屋を氏子とする岡神社にはなじまなくなり、しだいに祭りの開催期間が短縮された。現在は9月7日の1日間の開催となっている。祭りは、総代と東部祭組合役員（氏子）らの参列者が、岡神社の神殿前に整然と整列し、宮司に合わせ参列者が二拝二拍手拝を行い神事が始まる。次に宮司により祝詞とお祓いが行われる。

お祓いでは参列者は神殿に向かい頭を



岡神社



岡神社竣工式典（明治41年）



社殿神事の様子

垂れる。次に宮司が神殿から神輿（近年はさかき櫛になっている）に神を移す祝詞を唱える。櫛に神が移り終えたら、まず宮司が玉串奉奠を行い、引き続き総代長、その後に参列者が玉串奉奠を行い、宮司に合わせ二拝二拍手拝を行い、社殿での神事が終了する。神事後、御仮屋へ神輿の御神幸が行われていたが、近年は櫛を神輿に見立てて御仮屋まで総代らの手により運ばれ、御仮屋へ捧げられる。その後、御仮屋前に参列者が整列し、御着きの神事が宮司の祝詞により行われ、神が御仮屋に納まる。御仮屋には氏子により舞台を設けられており、神に神饌しんせんが奉納され、参列者は御神酒を給わり、神にささげる宴として、神楽の奉納や踊りなど芸能が行われる。

この芸能見物に、城下町や周辺地域の人々が訪れ賑わいを見せる。夜になると御仮屋を見下ろす高台に小松明が灯され、城下町の宵のうちを優しく照らし、祭りに華やかさが加わる。

岡神社の周辺地域において実施される善神王様祭は、城下町で夏期に開催される祭りの最後に行われる祭りである。本来、農村部の祭礼であった祭礼が、城下町の建設とともに移り住んできた人々に受け入れられ、五穀豊穰と城下町の繁栄を祈願する祭礼として、城下町に定着していった。

祭りの開催期間は短縮され1日のみとなったが、祭りを賑わす神楽の調子と小松明の幽玄な灯りが城下町を幻想的に彩り、竹田の城下町ならではの歴史的風致を今もなお醸かもし出している。



御仮屋での神事



神楽の奉納



小松明の様子



善神王様祭関連位置図

〇神明社大祭（スシ祭）^{しんめいしゃ}

岡藩による城下町建設は現本町筋より東側の地域が整備され、古町は寛文4年（1664）城下町に組み込まれた新しい町である。城下町に組み込まれる以前は、本町筋と古町の境に吉野池があり、この池を境として古町は在町として残こされ、吉野池の北側に城下町の出入り口である構口が設けられていた。城下町的发展に伴い吉野池が埋め立てられ、古町も城下町へ組み込まれ、以後城下町の入り口として繁栄してきた。

神明社は古町の中央部に鎮座する神社であり、天照大神と豊受比女命^{あまてらすおおみかみ とようけ ひ め のみこと}が祀られており、大祭は5月1日～2日にかけて古町祭組合により行われる。

「神明社由来」によると、原尻^{はらじり}（豊後大野市緒方町）の伊勢神宮の分霊に竹田からの参詣者が多かったことから、文禄3年

（1594）に原尻の伊勢神宮分霊を伊勢屋川^{かわ}口右衛門宅に奉安し神明社と称したのが

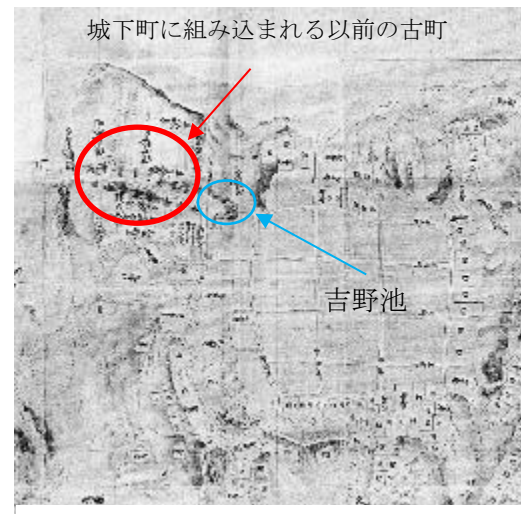
始まりで、城下町的发展に伴い各町ごとに氏神を祀る機運が高まり、古町でも神明社を氏神と崇められるようになり、町内の人々により社殿が正覚寺小路の角に

元文3年（1738）に造営された。また、寛保元年（1741）には岡藩6代藩主中川久忠の祈願所となり、神社地の課役が免除された。明治10年（1877）の西南戦争で社殿が焼失したが、翌年、正覚寺小路角から現在地に奉遷され社殿が再建された。社殿

は本殿・拝殿からなり、本殿は1間四方の神明造り銅版葺き、拝殿は桁行3間、梁行2間、入母屋造り棧瓦葺である。境内には八坂多賀・猿田彦社・住吉社・西宮社・天満社・稻荷社・春日社・琴平社の各社が祀られている。

社殿

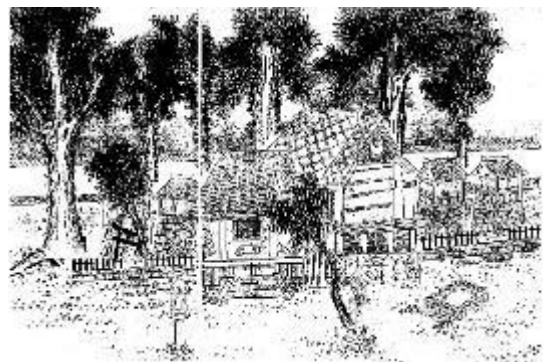
は本殿・拝殿からなり、本殿は1間四方の神明造り銅版葺き、拝殿は桁行3間、梁行2間、入母屋造り棧瓦葺である。境内には八坂多賀・猿田彦社・住吉社・西宮社・天満社・稻荷社・春日社・琴平社の各社が祀られている。



城下町絵図（寛文4年以前）



神明社



昭和33年に描かれた神明社

神明社の大祭は、古町地区の氏神である神明社に、古町地区の繁栄を祈念して行われる祭りで、5月1日と2日の2日間にわたり執り行われる。初日の5月1日は、氏子により神明社の清掃や祭旗立など大祭の準備が行われた後、総代や祭組合員（氏子）が神明社へ集まり、宮司に合わせ参列者が二拝二拍手一拝を行い神事が始まれ、次に宮司により祝詞とお祓いが行われる。

宮司による玉串奉奠が行われ、総代・祭組合の代表による玉串奉奠が行われる。最後に宮司に合わせ参列者が二拝二拍手一拝を行い初日の祭典は終わり、翌2日は、神楽の奉納や催し物が行われ賑わいを見せる。

明治41（1908）の竹田小学校同窓月報に「本月1日古町神明社にても祭典執行され有格社なれば奉幣使の参向あり、夜に入りては素人芝居軍談等有之候ひて古町辻も通行止の有様に候ふき」とあり、かつては芝居や軍談などの催しが行われ、古町の通りに通行止めとなるほどの人出で賑わっていた。祭りの期間に古町の住民が五目寿司を作って友人知人に振舞うことから、別名「スシ祭」とも呼ばれている。スシ祭の由来は、定かではないが一説には古町在住の料理人が、岡城の殿様にスシを差し上げたところ、殿様が大変お気に入りになり、喜んだ料理人が祭りでスシを振舞ったことが由来とされている。

寛文4年（1664）城下町に組み込まれに古町は、南北に延びる古町通りを挟み町屋が連なり、通りの中央部にある神明社は古町地区の氏神として古くから崇敬されてきた。古町の繁栄を祈念する大祭では氏子により厳かに神事が執り行われる。翌日は神楽や催しにより、周辺地域から多くの見物客が訪れ古町通は賑わいに包まれ、訪れた人々にスシを振舞う。神明社の大祭は城下町の入り口として繁栄してきた古町地区の固有の歴史的風致を見ることができる。



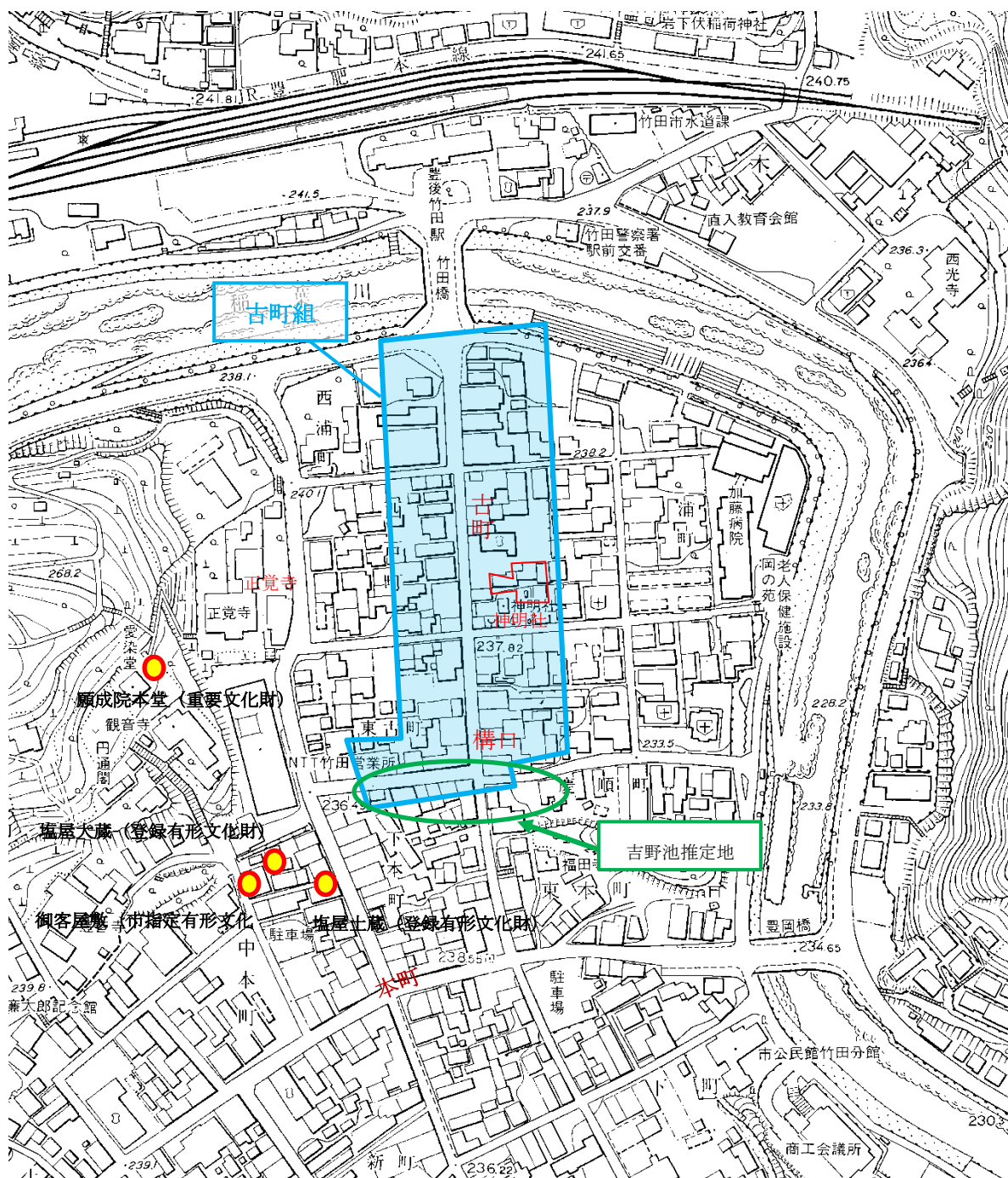
神明社の大祭の様子



神楽の奉納



スシの振舞いの様子



神明社大祭開催範囲

○城下町の恵比寿講

城下町に見られる祭礼である恵比寿講は、江戸時代以降城下町内の町家を中心に現在まで継続して行われている。恵比寿講は数件の家で組織された講組により行われる。

江戸時代の城下町における町屋の構造は、城下町の町屋は本町・上町等の「町」の集合体であり、その「町」はいくつかの「組」により構成されている、城下町で暮らしを行う住民は「組」単位で葬式の手伝いを行うなどの共同で生活を維持していく仕組みが存在していた。恵比寿講もこの「組」単位で城下町の町屋群全域に存在している。



下本町下組恵比寿講文書

下本町下組には嘉永7年(1854)からの恵比寿講の記録である「下本町下組恵比寿講文書」(市指定有形民俗文化財)残されているほか、他の組でも明治・大正期の恵比寿講の記録が確認されている。これらの記録により江戸時代後期には城下町で恵比寿講が行われていたことをうかがい知ることができる。現在は12組の恵比寿講が確認されている。

また、恵比寿講は行われる町家には、歴史的な建造物が数多く残されている、下本町地区にある元治2年(1865)の棟札がある木造土蔵造りの国の登録有形文化財塩屋土蔵(主屋・中蔵・古蔵)、田町地区には明治12年(1879)に建築された平入りの主屋と旧店舗兼主屋が、妻入りの旧味噌蔵を挟んで並び、変化のある町並み景観をつくり、敷地後方には土蔵が配される国の登録有形文化財佐藤家住宅、上町地区には明治11年(1878)に造り酒屋を営むために建てられた木造土蔵造の主屋・土蔵・木造の3棟の倉庫・中庭で構成される市内の町屋を代表する建築物である国の登録有形文化財吉川家住宅があり、周辺において恵比寿講が執り行われている。

恵比寿は漁業・漁師の神であるとともに商業・流通の神でもあり、この恵比寿を町場で祭ることは組を構成している商家の繁盛を願って始められたと同時に、共通の神である恵比寿を祭るという行為を通して、「組」の親睦を図るとともに、共同体としての意識を喚起し、相互に扶助し全体で繁栄していこうという願いも込められていたといえ、現在もなお、城下町で生活する人々が共同して生活を維持する仕組みである講組が、恵比寿講を通じて見ることができる。

恵比寿講は本来旧暦の2月3日に行われていたが、近年では2月下旬から3月上旬の土日に行われる組が多い。恵比寿講は、各講組により若干の違いはあるがほぼ同じような形態でとり行われる。平成25年に上本町組で行われた恵比寿講では、座前(講組の代表)が組の人々に回覧や掲示板により恵比寿講開催を呼びかける。祭礼当日は、前回の座前之家に講組の人々が集まり竹を立て、幕を引垂れ、しめ縄を張る等して祭壇を



前回の座前之家での神事

作り、講の準備を行う。祭礼の時間になると前回の座前の挨拶があり、神職を招き「お立ちの御神酒上げ」の神事を行う。

神事では神職による祝詞が行われ、次に神職による玉串奉奠が行われ、前の座前から順に講組に所属する全家庭が玉串を奉奠する。神事が済むと、座前が先頭で恵比寿様を抱え、その後ろを講組の人々が続き、講組を一軒一軒廻る「町廻り」を行う。

「町廻り」では笹を持ったり、「ドン・ドン」と太鼓を鳴らしながら行う組もあり、講組内を廻り、座前之家に到着すると、鯛や野菜などを備えた祭壇で神事を行う。その後座前之家で「直会」が行われるが、近年は集会所や料亭で行われることが多い。

座前之家で1年間祀られた恵比寿様は翌年の恵比寿講において、次の座前之家に移す、この組内での持ち回りが本来の形であるが、近年は各家で恵比寿を祀ることが困難な状況が生まれた組もあり、別に社を設けたり、寺社に預けたりしている組も数組ある。

早春の城下町で恵比寿像を抱え、静々と行われる講組の町廻りは、華やかさはないが、歴史的な建造物が立ち並ぶ城下町において、延々と継承されてきた地域住民の絆の証であり、城下町の繁栄を支えてきた住民活動の礎となるものであるといえる。



町廻り



座前之家での神事



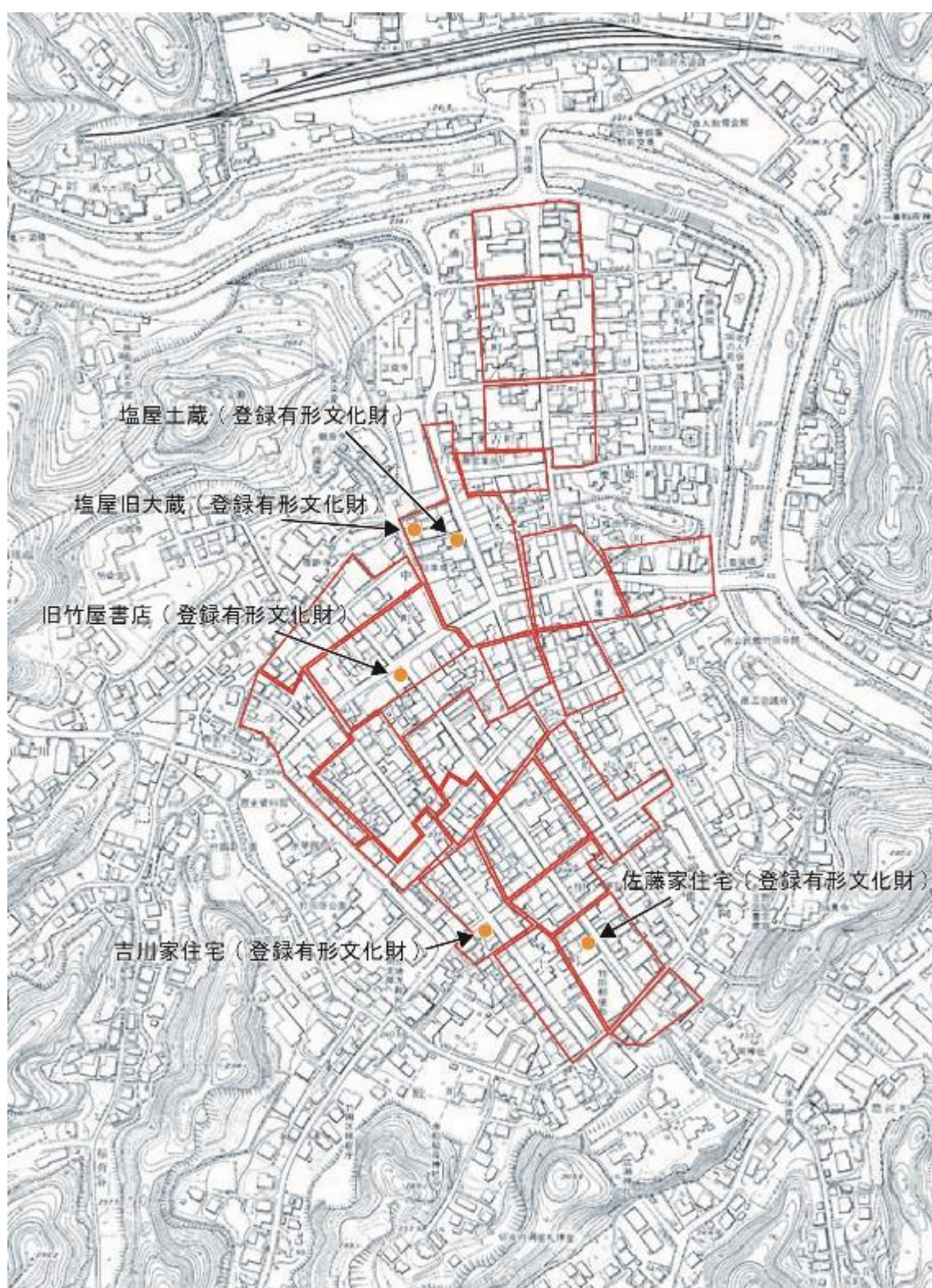
直会の様子



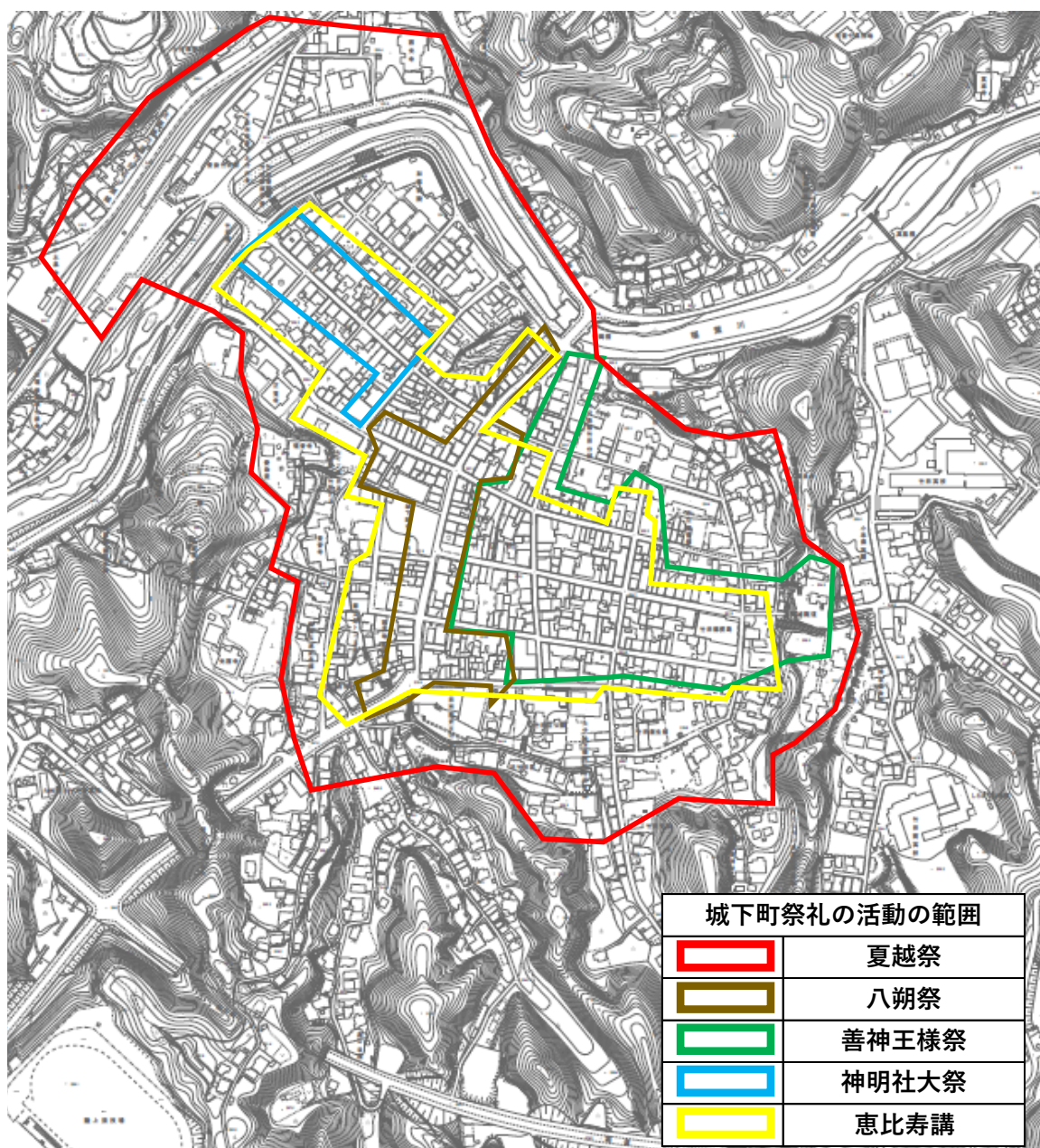
上町中組の恵比寿象



上本町組の恵比寿象



城下町恵比寿講分布図

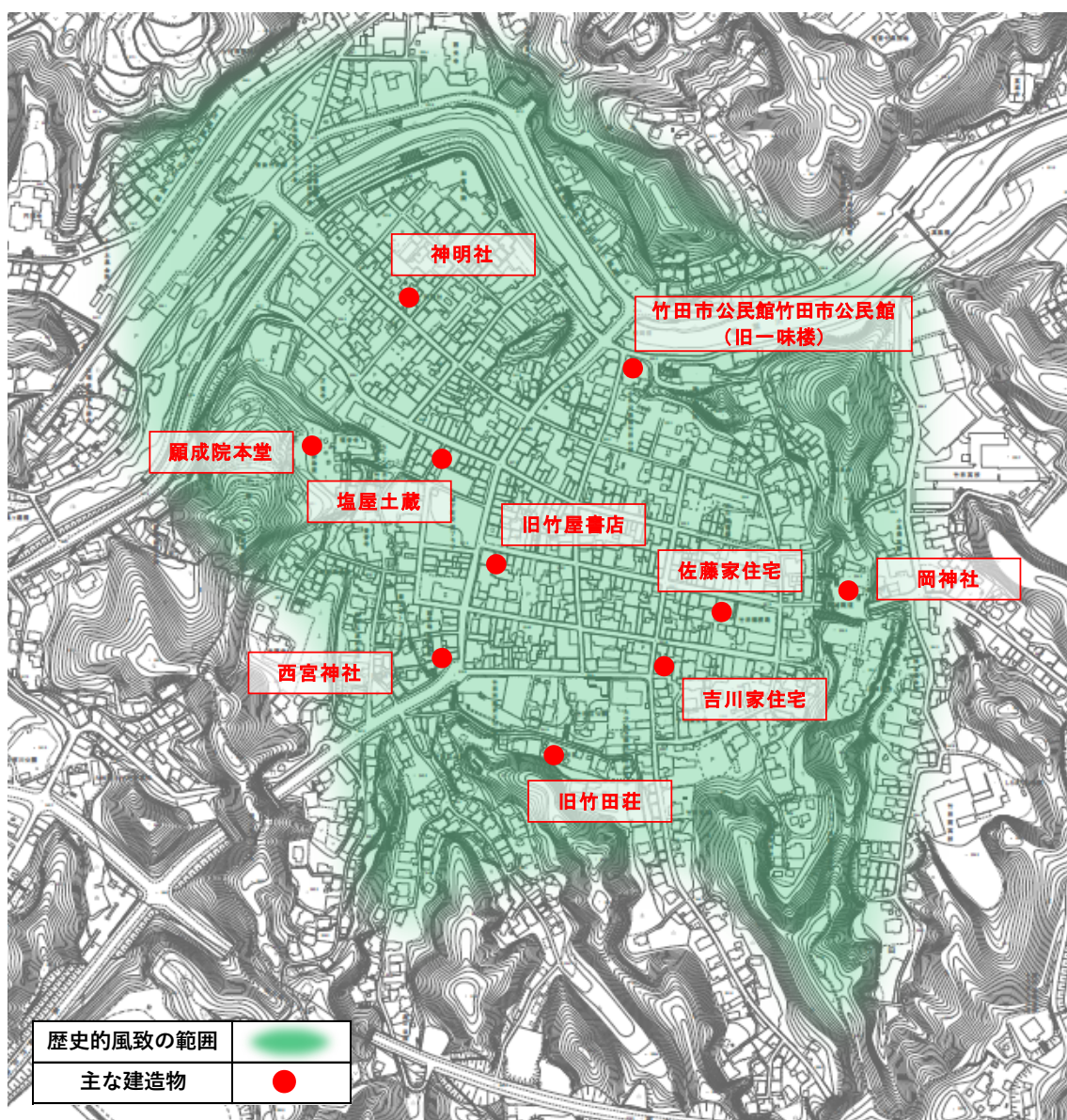


城下町祭礼の活動の範囲

④まとめ

城下町（竹田町）の祭礼の構造は、各通りで形成される講組（班）、講組が集まり形成される小町組、小町組が集まり形成される町組（古町組、本町組、東部祭組合）により祭礼が執り行われている。これは、江戸時代に整えられた町のしくみであり、祭礼のみではなく城下町の人々の生活共同体として、重要な機能を持った、竹田城下町の特有のしくみである。

塩屋土蔵や佐藤家住宅などの歴史的建造物が残される城下町の町並みを背景に行われる、講組（班）による恵比寿講、古町組の神明社大祭、本町組の西宮神社の八朔祭、東部祭組合の岡神社の善神王様祭、城下町最大の祭である夏越祭などの祭礼は、特有な町のしくみにより維持されてきた歴史的風致である。



城下町祭礼の歴史的風致の範囲

（２）旧竹田荘と豊後南画の祖田能村竹田顕彰活動にみる歴史的風致

①はじめに

竹田城下町は、江戸時代以降奥豊後における政治・経済・文化の中心地として栄えてきた。今もなお城下町建設当時の町割りでは住民が生活をし、国指定史跡旧竹田荘や重要文化財願成院本堂をはじめとする歴史的な建造物が数多く残されている。また、田能村竹田・瀧廉太郎・廣瀬武夫などの偉人を数多く輩出する土壌を培い、今なお当時の面影のままの町並みから歴史と文化を感じることができる。それらの偉人を顕彰する活動が市民により行われている。

田能村竹田（1777～1835）は、安永6年（1777）岡藩医田能村碩庵の次男として生まれ、天保6年（1835）大坂中島の岡藩蔵屋敷で没した。諱は孝憲、幼名を磯吉、通称は行蔵である。

「竹田」は田能村家の居宅（竹田荘）が竹田村にあったことから付けた号である。竹田は幼少から学問に非凡な才能を示し、早くから藩校由学館に勤務した。22歳のときには、幕府の内命により岡藩が編纂した地誌『豊後国志』（享和3年：1803）の編纂員となり、師・唐橋君山の下で豊後各地の調査に従事した。唐橋没後は編纂実務の中心となり、『豊後国志』の幕府献本について江戸で幕府老中と最終折衝を行った。

『豊後国志』編纂終了後の文化2年（1805）、29歳のとき竹田は初めて上方に遊学し、浦上玉堂、岡田米山人、村瀬栲亭ら文人、儒者たちとの交流を通じて自分の詩学の力量に自信を深めた。また、この遊学中から自身の健康問題や詩学への情熱のため早期の隠居を希望するようになった。

隠居希望は周囲の説得もあり容易にはかなえられなかったが、一子太一（如仙）の誕生・成長により、文化10年（1813）竹田37歳のとき、隠居が藩に許可された。

竹田は以後、ほぼ毎年上方を中心に諸方を旅して頼山陽、廣瀬淡窓、菅茶山、青木木米、末広雲華ら各地の文人たちと交流を深めた。

特に頼山陽との親交は厚く、竹田の傑作「亦復一楽帖」「松巒古寺図」（いずれも重要文化財）に関連する挿話が遺されている。

また、竹田の文人としての名声の高まりも文政元年（1818）に山陽が竹田荘を訪問したことがきっかけであった。

竹田は儒学者として出発し、茶道や香道にも通じたが、若年より文人の嗜みの一つである作画への関心があった。

竹田の本格的な作画が始まるのは、最初上方遊学から帰国した、竹田が30代のときからである。竹田の初期作品は花鳥図に優品が多いが、山水画は中国画の模倣の側面が強い。

竹田が独自の画法を確立するのは、文政9～10年（1826～27）の長崎旅行を契



田能村竹田像

機としている。

竹田はこの旅行において、長年憧^{しょうけい}憬の対象であった中国の人や文物を直接見聞き、日本と中国の人、風土の差異を実感した。

そうした経験を通じて竹田は以後日本的情趣に満ちた作品を遺し、我が国を代表する南画家の一人となった。また、竹田は画作だけでなく画の批評についても当時は評価の低かった浦上玉堂を評価するなど時代に先駆けた識見を持っていた。竹田の優れた批評眼による画論『山中人饒舌』『竹田莊師友画録』は、江戸時代絵画史を研究する上で現在も必読のものとなっている。

このように実作者としても批評家としても優れた才能を持った竹田とその充実した南画作品の登場は、絵画の流派的展開の乏しかった豊後の画人たちに大きな影響を与えた。

竹田の門下からは高橋草^{たかはし}坪・帆足杏^ほ雨・田能村直^{たのむらち}入ら優れた力量を備えた画人が輩出されたことに加えて、多くの豊後の画人たちが南画作品を制作したことで、豊後は幕末から近代にかけて南画の一大中心地となった。特に竹田のお膝下ともいえる城下町竹田からは、淵野桂^{ふちのけい}儼・渡邊拈^{わたなべ}華・田近竹^{たぢか}邨ら有名無名含めて多くの南画家が生まれた。

これは城下町竹田の人々が、竹田の活動の影響を直接に受ける機会が多かったためと考えられる。

竹田は諸方を旅したが、終生拠り所としたのは竹田荘であり、城下町竹田の人々であった。

②建造物

○旧竹田荘（国の史跡）

（母屋・草際吟舎・補拙蘆・筆塚は国史跡の構成要素、田能村竹田墓は附）

母屋

竹田の生家でもあり、豊後南画の塾ともなった旧竹田荘は、城下町の上殿町の北面した高台の上にある。寛政元年（1789）の城下町大火の際、類焼を受け、全焼し、翌寛政2年（1790）に母屋が再建された。母屋は西向きに玄関を持つ2階建瓦葺の建物で、2階3室のうち10畳が竹田の書斎「対翠楼（雪月楼）」であったと伝えられる。



そうさいぎんしゃ
草際吟舎

草際吟舎は、文化3年（1806）に建立されたが、明治年間に取り壊され、昭和7年（1932）に古図を基に再建されたものである。構造は、木造土蔵造2階建てで1階に茶室を持つ、2階を書庫として使用されていた。



ほせつろ
補拙蘆

竹田の門人たちの塾である補拙蘆は文政9年（1826）に建てられたとされているが、明治年間に取り壊され、昭和7年（1932）に古図を基に再建されたものである。その構造は、木造平屋建瓦葺で切妻の屋根を持つ。



筆塚

池を有する庭園に筆塚があり「元たる石、以って汝の恩の証を記す」と竹田の手で書かれている。

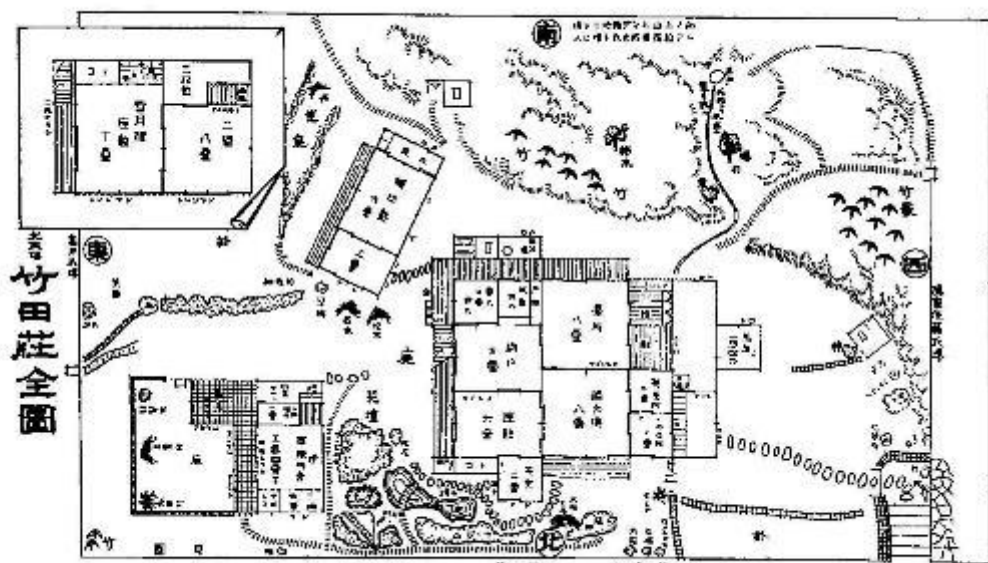
画聖堂

旧竹田荘西側には竹田会により建設された木造入母屋造りの内部に竹田を祀る祭壇及び茶室を有する画聖堂がある。



田能村竹田の墓

旧竹田荘の西にある胡麻生峠ごもうとうげには、田能村竹田の遺髪を納めた田能村竹田の墓が存在する。



竹田の嫡子、田能村如仙が描いたもの。三角亭(損亭)、補拙蘆附帯便所は現存していない。

③活動

竹田が活動した19世紀、城下町竹田では漢詩や中国から新しく入ってきた絵画を巡り、身分を超えた交流が生まれていた。竹田はそうした環境の中で、地元の人々と詩や絵について議論を交わし、また地元の人々は竹田から最先端の文化的知識を得るなど、双方が刺激を与えあっていたと考えられている。

『^{たけ た き ぶん}竹田奇聞』によると、城下町竹田における漢詩や書画を語らう場として「^{すいせきかい}水石会」が設けられ、そこから田能村竹田を顕彰する会である「^{ちくでんかい}竹田会」（大正10年頃）へ発展したと記されている。

「竹田会」は明治維新後田能村家の手を離れ、荒廃していた竹田荘を買い取り、竹田町（現竹田市）に移管するという史跡整備の走りともいえる活動を行っていることは注目される。

「竹田会」は昭和59年（1984）の「田能村竹田150年祭」に際し、発展解消され「財団法人田能村竹田顕彰会」が設立された。

その活動は「竹田会」の活動も含め、毎年行う竹田先生年祭に加え、これまでに「田能村竹田100年祭」での画聖堂の建設（昭和9年）、「田能村竹田150年祭」等の区切りの年には地域をあげての祭典を行ってきた。毎年行われる竹田先生年祭は11月1日～3日の3日間行われ、11月1日は、田能村竹田の墓において竹田墓前祭を行う。

墓前祭では、顕彰会の役員や関係者が参列し、まず市内の寺の住職による読経が行われ、顕彰会理事長から順に焼香が行われ厳粛な雰囲気の中で田能村竹田の冥福を祈る儀式が行われる。

2日は、国指定史跡旧竹田荘において茶会が催される。茶会は、旧竹田荘母屋にて濃茶、草際吟舎にて煎茶、^{せいせんや}画聖堂前の庭にて野点が行われ、訪れた人々に茶が振る舞われ、この茶会は翌3も開催される。



田能村竹田百年を記念し竹田駅前に作られたアーチ



墓前祭の様子



茶会

3日は、画聖堂において^{けんちやしき}献茶式が行われる。

献茶式では、画聖堂内の祭壇前で煎茶と濃茶が同時に点てられ、茶の湯に造詣の深かった田能村竹田像に捧げられる。

その後、市内の寺の住職による法要が営まれ、顕彰会理事長の挨拶で献茶式が終了する。

他に竹田先生年祭では田能村竹田や弟子たちの作品を展示する^{いぼくてん}遺墨展も3日間画聖堂で開催される。

また、10年毎や50年・100年の節目に行われる年祭では、田能村竹田に関する出版物を発行するなど田能村竹田顕彰活動が続けているほか、近年には「まちかど南画館」として城下町内の各所にて田能村竹田の作品を紹介している。

また、竹田総合文化ホールグランツたけたを会場として田能村竹田先生を^{しの}偲ぶ美術祭(昭和23年～)を竹田市と共催し市内外の児童・生徒へ田能村竹田の偉業を伝え、次代の田能村竹田を育てる活動も行っている。

この他には、竹田商工会議所青年部が昭和49年(1974)～平成16年(1994)の30年に渡り、田能村竹田の作品を中心に南画作品を紹介する展覧会「文人書画展」を開催し、そのとき制作された図録は豊後南画作品の貴重な資料集となっている。また、昭和56年(1981)には伝統的文化的都市事業の一環として、竹田荘の隣接地に竹田市立歴史資料館が開館した。資料館では開館以来、田能村竹田、南画作品を主要研究テーマとし、常設展では収蔵する竹田他の南画作品を紹介し、年に1回研究成果を反映した特別展を開催してきた。

平成28年の熊本地震で資料館が被災し、展示は中断していたが、令和2年に同所にオープンした竹田市歴史文化館・由学館にて更にグレードアップした展示を行っている。

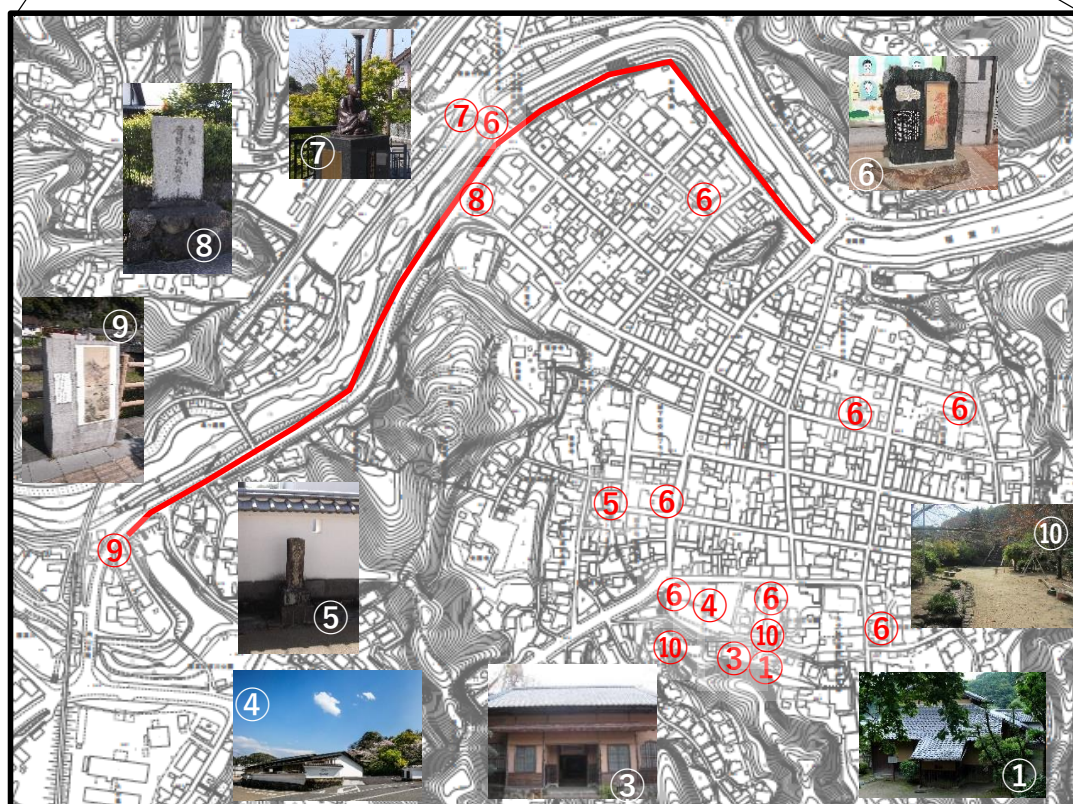
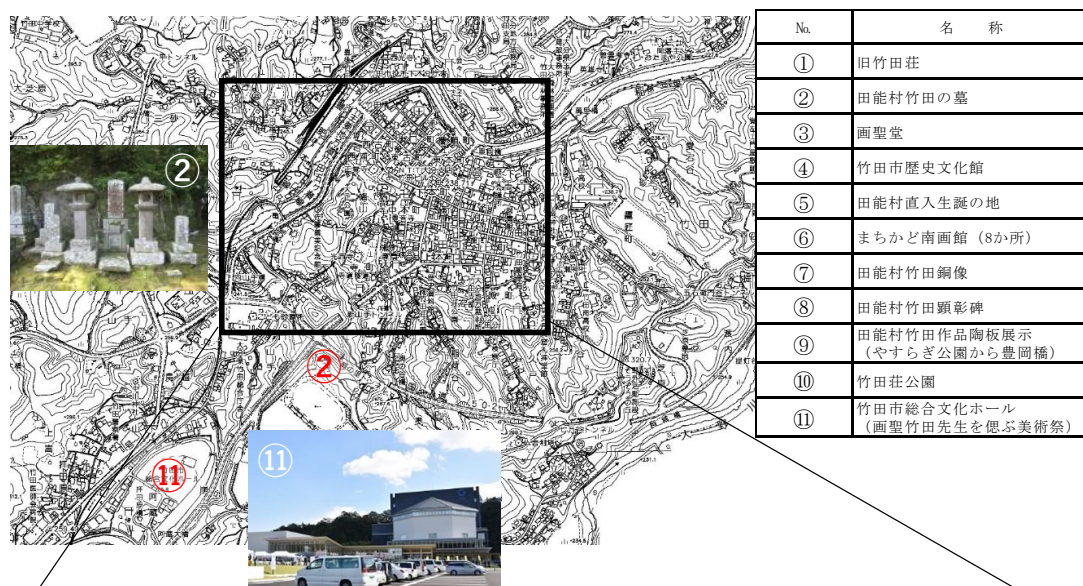
また、稲葉川沿いに並べられた田能村竹田作品の陶板展示の起点となる稲葉川やすらぎ公園は文化8年(1811)に起こった四原一揆時に城下町へ乱入しようとした一揆勢が集結した山手河原と呼ばれる場所であり、田能村竹田はこの一揆に対し藩主へ建言書を差出し、百姓の要求を聞き届けるべきと藩政への意見を申している。竹田荘周辺に竹田荘公園が造られ、市民が普段のくらしの中で先人の残した偉業に素直に触れることができる。



献茶会



田能村竹田先生を偲ぶ美術祭



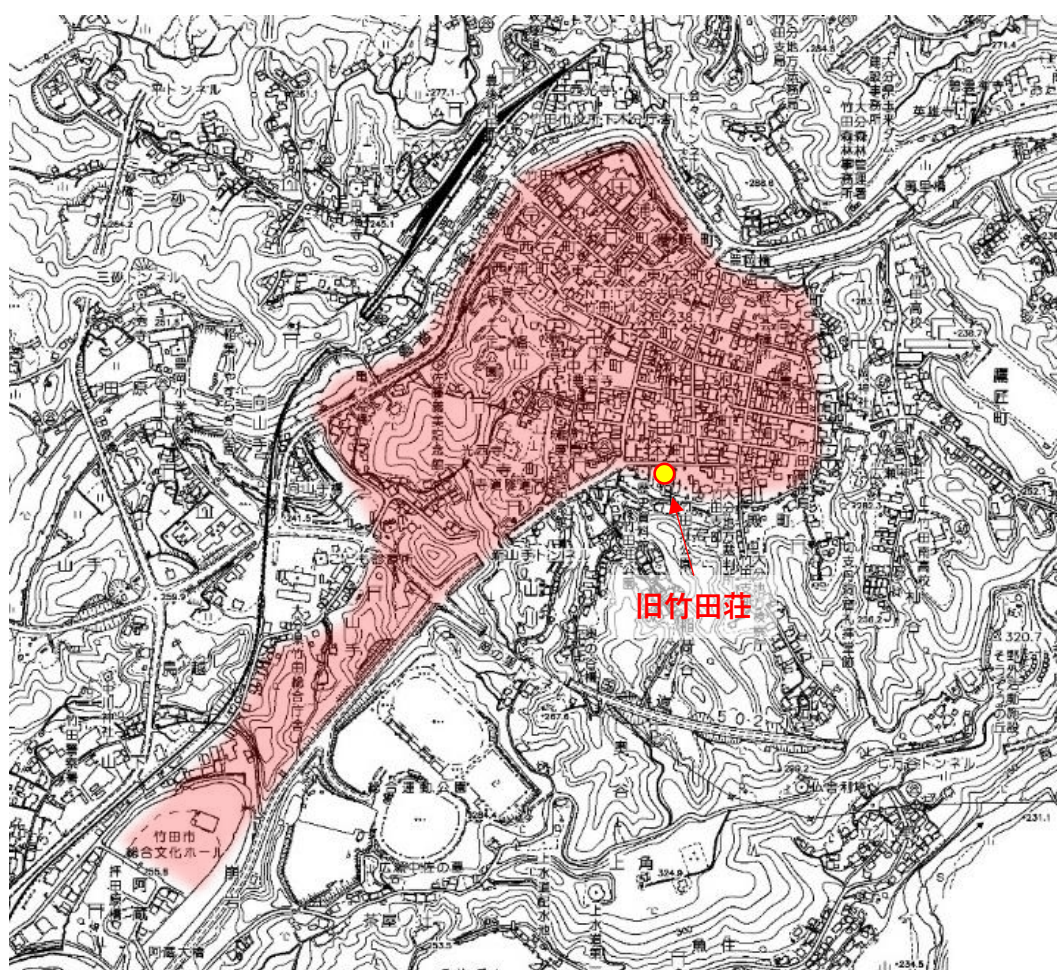
田能村竹田顕彰活動関係位置図

④まとめ

竹田市は、田能村竹田、瀧廉太郎、廣瀬武夫など各多くの偉人を生み出しており、市内ではこの先人たちを顕彰する団体が組織されて盛んに活動が行われている。

その中でも田能村竹田の顕彰活動は明治初期の「水石会」の誕生以降「竹田会」「田能村竹田顕彰会」と名前を変えて延々続いている。田能村竹田顕彰会により行われている竹田先生年祭では、竹田の冥福を祈る墓前祭や旧竹田荘で煎茶や濃茶の茶会が行われ、茶会では旧竹田荘全体が主客一体となった風流な雰囲気にも包まれる。

近年では、「奥豊後南画の里づくり」の市民団体も組織されるなど、旧竹田荘を活動の場の中心として始まった顕彰活動は、画聖田能村竹田を育んだ城下町一円に広がり、市民にもその活動が周知され、その顕彰活動に老若男女を問わず多くの市民が参加している様子を見ることが出来る田能村竹田ゆかりの地ならではの歴史的風致である。



旧竹田荘と豊後南画の祖田能村竹田顕彰活動にみる歴史的風致の範囲

（３）久住高原の野焼きにみる歴史的風致

①はじめに

竹田市の北部（久住地区・直入地区）は、久住連山の裾に広がる高原地帯である。江戸時代には豊後と肥後を結ぶ肥後街道、竹田と日田を結ぶ日田往還ひ た おうかんが交差する交通の要衝として栄えており、この街道は現在でも主要な道路として利用されている。また、久住連山を源とする湧水や温泉が各所に湧出しており江戸時代以降湯治場として利用されている。久住高原は久住連山南麓の裾野に広がる標高 600 m～1,000mの高原であり、阿蘇くじゅう国立公園に含まれる。

久住高原は黒色火山灰土でおおわれており、ネザサ・ススキ・ワラビなどの自然草が植生し、長い年月の間、牛馬の放牧や採草のために、野焼きを行い、草原の景観を維持してきた人為的草原である。これらの草原は入会権のある採草放牧地であり、古来から「むら（現牧野組合）」が管理してきた土地である。

久住高原の歴史は古く、鎌倉時代に源頼朝みなものよりともが梶原景高・仁田忠常等かじわらかげたかを阿蘇神社に遣わし、宮司から巻狩りの作法を学ばせ、その先導で久住山の裾野で巻狩りを行った場所であり、また古来より馬飼育が盛んに行われ、江戸時代になると農耕・運搬用の牛馬の飼育が盛んとなった。久住手永文書くじゅうてながもんじょの「文政 12 年天保 2 年卯年日記」によると放馬について連絡を取合う記述や、野方焼方（野焼き）の日限について連絡を取合う記述がみられる。

明治時代以降は、使役用のみでなく食用として牛の需要が増え、草原は畜産飼料の供給源、また放牧地として人々の生活を支えてきた。特に、大分県種畜場（現大分県農林水産研究指導センター畜産研究部）が設立されて以降、県内の畜産を代表する地域となっている。大分県農林水産研究指導センター畜産研究部は明治 39 年（1906）に県種畜場として、久住高原に設立され、家畜の改良・繁殖・飼養管理・人工授精・大分県に適した牧草の選定など、畜産全般にわたる技術開発や普及を行っている



久住高原の草原



放牧の様子

②建築物

○大分県農林水産研究指導センター畜産研究部の建築物

大分県農林水産研究センター畜産試験場が発行した『百年のあゆみ』（2006）に、同センター内に現存する建築物について記載されている。

木造倉庫

木造平屋建ての倉庫（昭和7年(1932)）、

旧水車舎

木造平屋建ての旧水車舎（昭和21年(1946)）

産肉検定牛舎

木造二階建ての産肉検定牛舎（昭和27年(1952)）

種雄牛舎

木造二階建ての種雄牛舎2棟（昭和39・40年(1964・1965)）



県農水研究指導センター
（産肉検定牛舎）

③活動

草原は、繁殖雌牛を草地に放し飼いにする放牧や冬季の飼料のための干し草の原料となることから、久住高原では古来より野焼きを行うことにより木々の繁茂を防ぎ、焼灰が肥料となり良好な草原の維持をおこなっている。

野焼きの手順は、8月下旬から9月上旬にワチギリと呼ばれる防火帯を刈り込む作が行われ、ワチギリから一週間ほどして刈り取った草が乾いた頃にワチヤキを行い防火帯が完成する。（堀を掘った防火帯もある）これにより野焼きによる延焼を防ぐことができる。

翌年の3月上旬に草原に^{ほくや}牧野組合員が火入れを行う。火入れは早朝から行われる。高い場所もしくは風上側から行い、逐次下がりながら火がつけられ、火がつけられると風にあおられ炎は数mの高さに達し、牧野組合・地元の消防団員・ボランティアの人々が火の番にあたり延焼を防ぐ。



防火帯（ワチギリ）



ワチギリを行う牧野組合



林の前に堀を作り防火帯として
いる



野焼きに参加する、牧野組合員・
地元の消防団員等の集合の様子



火入れの様子



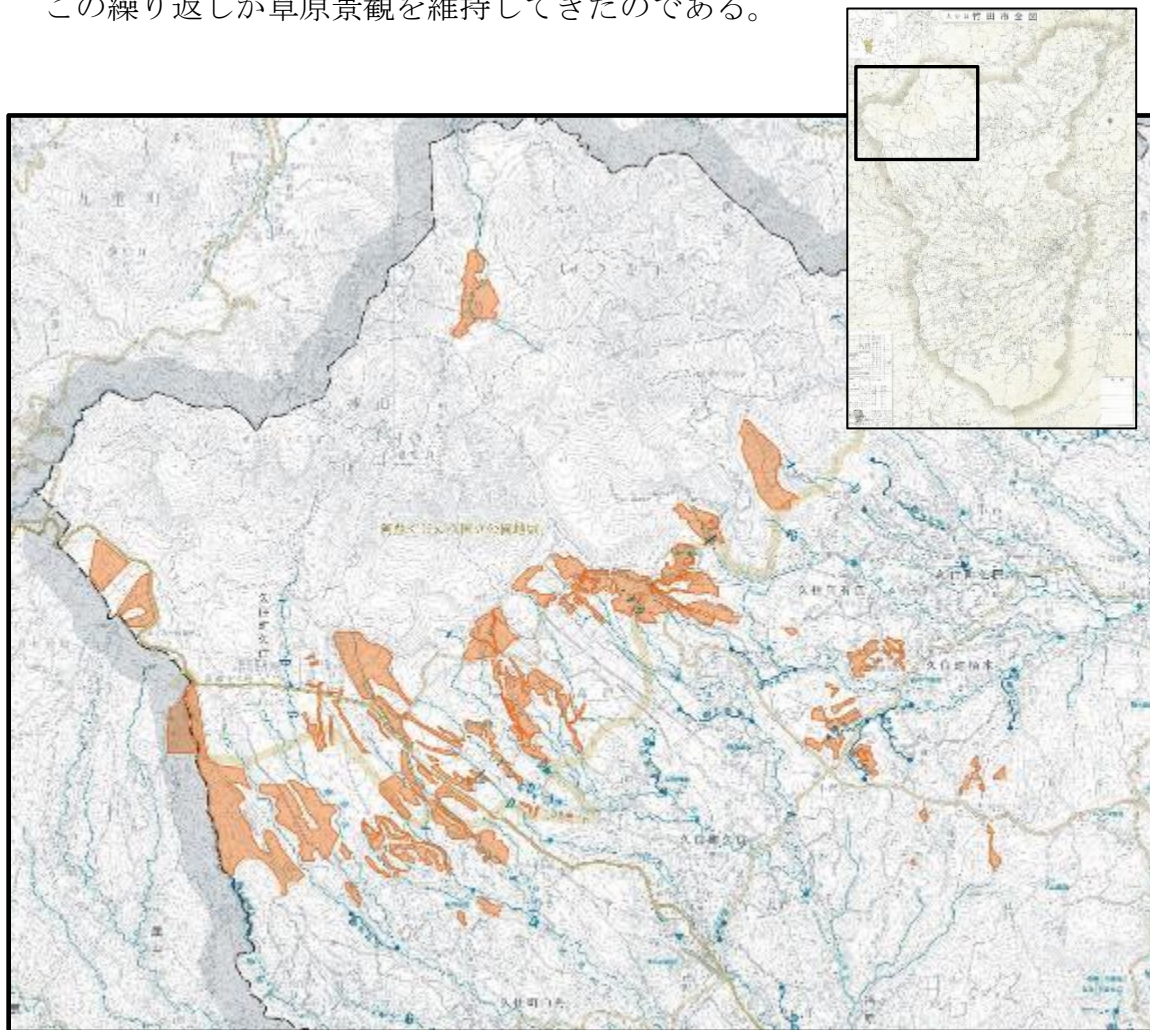
久住高原の野焼き

あらかじめ決められた消火地点まで燃やすと消火作業が行われる。

消火は重要な作業であり、檜や杉の枝を材料とした「火消棒」「火打ち棒」などを用いて参加者全員で消火するが、近年ではジェットシューターなども使われている。

野焼き後の草原は、一面黒一色に姿を変え、4月になると草原に牧草の新芽が生え、5月頃から11月頃まで放牧や採草を行い、3月になるとまた野焼きを行う。

この繰り返しが草原景観を維持してきたのである。

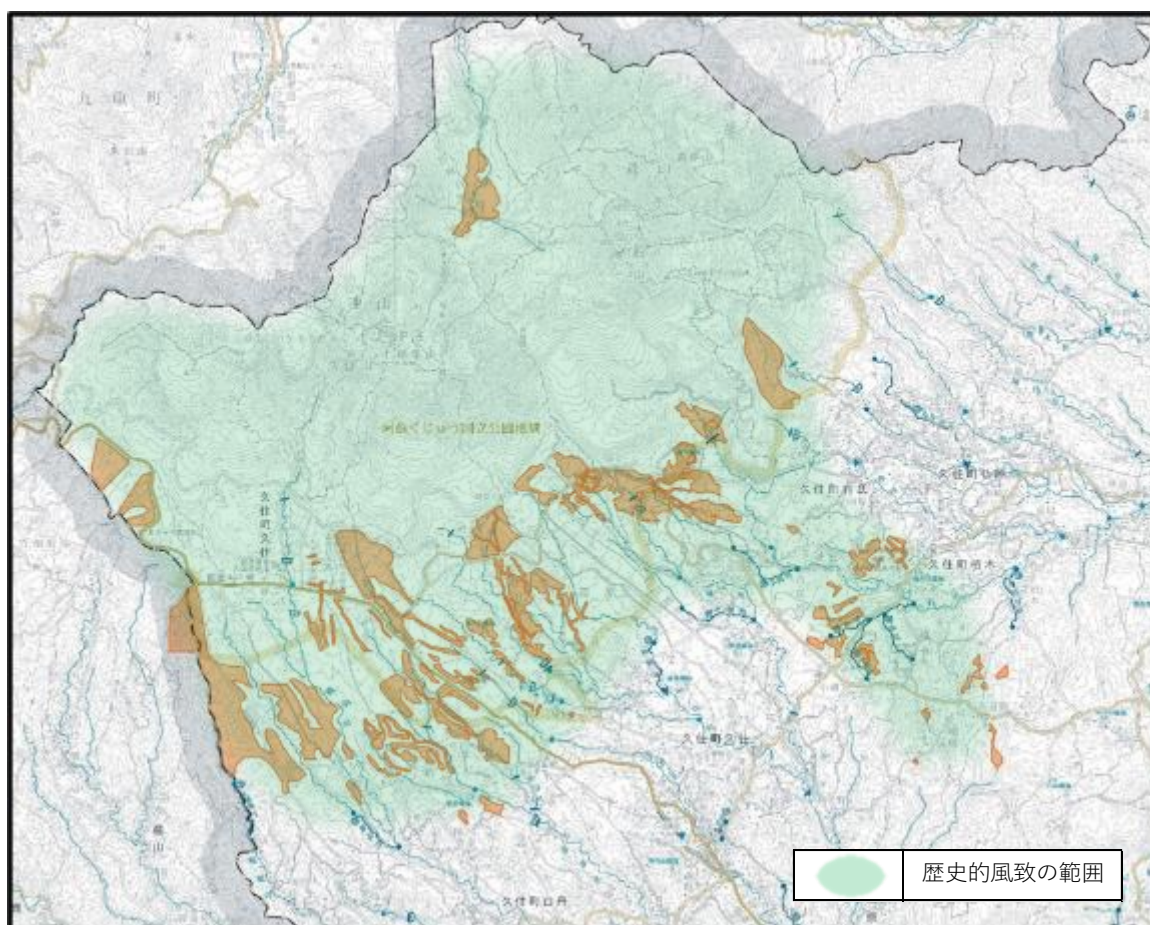


久住高原の野焼き実施範囲

④まとめ

久住高原は古来より牛馬の飼育が行われてきた場所であり、牛馬の飼育に必要な草地の確保のため野焼きが行われてきた。

現在見ることができる広大な草地は長い年月をかけ、高原に住む人々の営みと久住高原の大自然の共生により造られたものであり、これらの草地は現在も放牧や採草地として使用されているだけでなく、市を代表する景観として雄大な久住高原を訪れる人々に四季折々の顔を見せてくれる歴史的風致である。



久住高原の野焼きにみる歴史的風致の範囲図

（４）久住神社の久住夏越祭にみる歴史的風致

①はじめに

久住地域は、豊後と肥後を結ぶ肥後街道、竹田と日田を結ぶ日田往還が交差する交通の要衝であり久住は宿場町として栄え、また江戸時代を通じ肥後藩の代官所が置かれ、久住・小国（熊本県小国地域）地域支配の拠点となった。この久住に鎮座する久住神社の神輿が建宮神社へ御神幸する祭りである久住夏越祭が８月に開催され、周辺地域から多くの見物客が訪れ賑わいをみせる。

久住神社の由緒は大化２年（646）にこの地に夜ごと稲光に似た光が流れるようになり、大空から一片の白旗が降りてきた。白旗の上に白鷺が現れ「この旗は紀州亀山神社のご神霊である・・・。」とかたり、翌朝そこへ行ってみると丸い石が見つかった。ただちに神しらさぎ殿を建てるべきと話し合い、建てられたのが建宮神社である。その後、建宮から白鷺が飛び立って杉小野の柿の木に舞い降りた、これを見た村人は建宮の祭神が飛び立ったと考え、この地に御遷座したいのであろうと、推測し御神殿を建立した。これが久住神社であり、建宮神社を元宮、久住神社を新宮とも呼んでいる。天正１４年（1586）の豊薩戦争で荒廃していたが、肥後藩主加藤清正により再建され、以後久住手永かとうていながの一円の氏神として崇拝されている。

②建造物

○久住神社

久住神社の社殿は本殿・申殿・拝殿ほんでん もうすでん はいでんからなり、本殿は３間社流造、銅版葺。申殿は正面３間、側面３間の入母屋造。拝殿は桁行６間、梁行２間、入母屋造の大型拝殿である。『久住町史』（昭和５９年）によると、久住神社のこの地への創建が寛文６年（1666）であることからこの時期の建立と考えられる。



久住神社

○建宮神社

『久住町史』（昭和５９年）によると、建宮神社については明治時代以前の建立と考えられる。社殿は本殿・拝殿からなり、本殿は３間社流造、銅版葺、拝殿は桁行５間、梁行２間の入母屋造である。



建宮神社

③活動

久住夏越祭は、古来から農作物を風や台風の被害から守るための祭りである「風除け祭り」いわゆる風鎮債であったとされ、元禄13年（1699）に御神幸が行われたことが始まりとされるが、「後年記」（文久元年：1860）に久住夏越祭の賑わいについての記述があることから少なくとも江戸時代後期には祭りが開催されていたことがわかる。

江戸時代の久住地域は、肥後藩の地方支配組織である久住手永（竹田市久住地域・阿蘇市波野・阿蘇郡産山村）に所属し、手長支配の中心になる手長会所が久住に置かれていた。手永会所の長官は惣庄屋が努めた。久住夏越祭りは久住会所が一切を差配し、久住手永の各町村の庄屋はもれなく参列することが決められており、肥後藩による庇護を受けてきた。久住夏越祭で巡行される「本山車」も肥後藩主細川公が、祭りを賑やかにするために、始めさせたのが始まりとされている。

久住夏越祭は前夜祭と2日間の祭典で行われていたが、近年は前夜祭と1日の祭典に短縮している。本山車については事前に神社総代から作成要請を受け決定する。前夜祭では4町（新町・田向町・本町・下町）の氏子により子供山車を造り、子供たちが車を引き、笛や太鼓などでお囃子を鳴らしながら町内を巡行する。

夜半に4町の氏子が集まり鐘や太鼓を鳴らしながら町内を廻る「夜渡太鼓」を行う。「夜渡太鼓」では、山車の巡行ルートを取り最後に久住神社社殿の周りを2周し、社殿を参拝する。翌朝、4町の氏子（新町・田向町・本町・下町）が「本山車」造りを始める。この山車の特徴は、各町がそれぞれ演題を決め、背景を各家庭の日用品や自然の草花等を材料とした見立て



久住夏越祭の神輿御神幸



子供山車の巡行



夜渡太鼓



山車作成の様子

細工で山車を飾り、人を人形に見立てた生人形を乗せる。演題は、偉人や英雄や物語の主人公であったり、世相を反映した」演題であったりする。山車は夕刻までに山車を造り上げる。

久住神社では総代、各町の役員、獅子舞楽員等が参列し、神事が行われる。

神事では、祝詞・総代や役員による玉串奉奠・建宮獅子舞のお祓いが厳かに執り行われる。神事後、杉小野地区の氏子により、神の出現を乞うて舞う幣神楽



神事（総代・各町役員）



神事（建宮獅子舞楽員）



幣神楽

（ヒーカグラ）、建宮地区の氏子による建宮獅子舞の御起舞、神輿の御発ちが行われる。御発ちは、神面をつけた2体の御先荒神と建宮獅子舞が神輿を先導し、獅子舞が各家に舞込を行いながら各町を廻り建宮神社へ御神幸を行う。本来は、建宮神社で納めを行い神輿が一泊していたが、現在は、その日の午後に建宮神社



建宮獅子舞御起舞



神輿御発ち



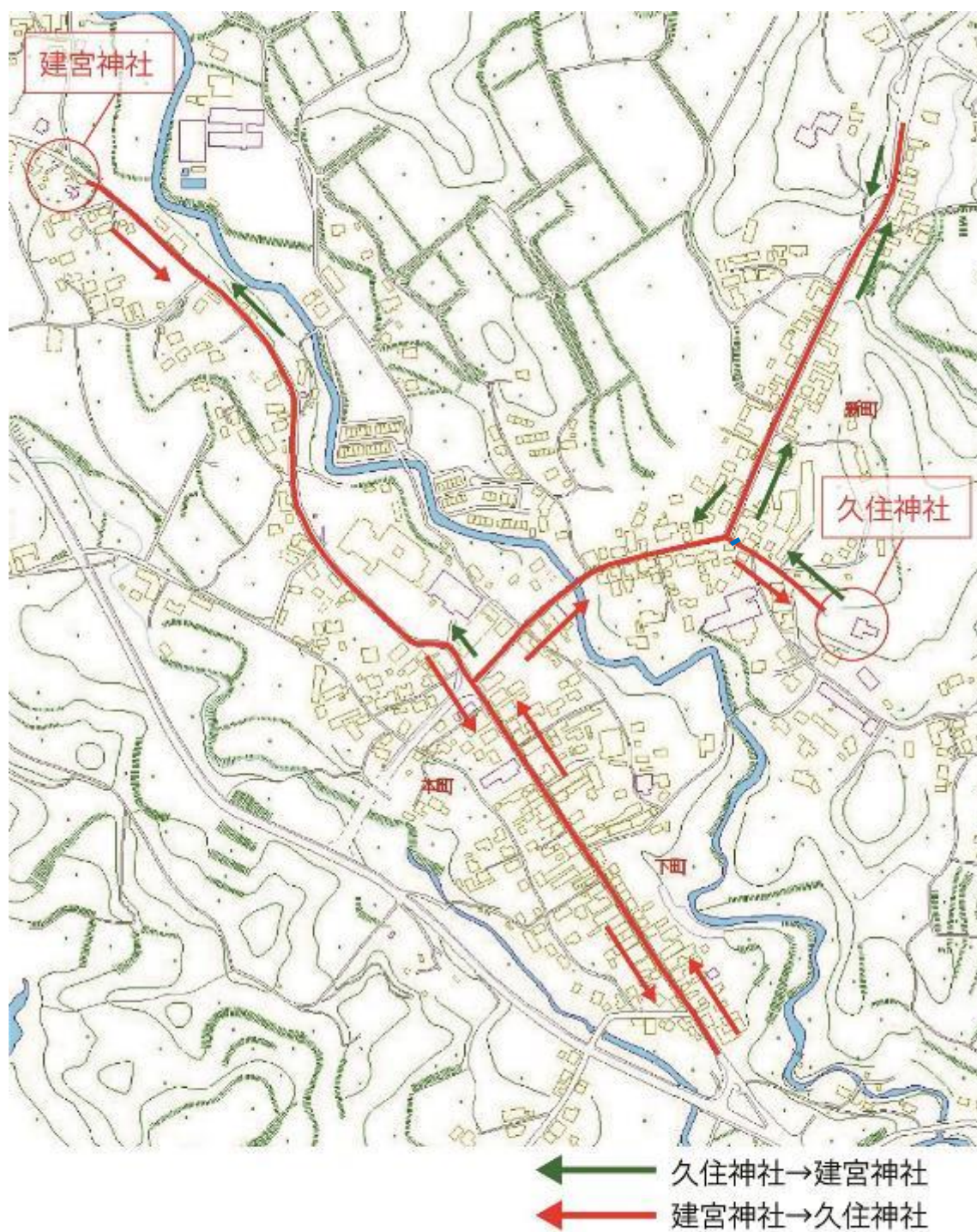
神輿御神幸

を神輿が発ち町内を御神幸し、久住神社へ帰る。

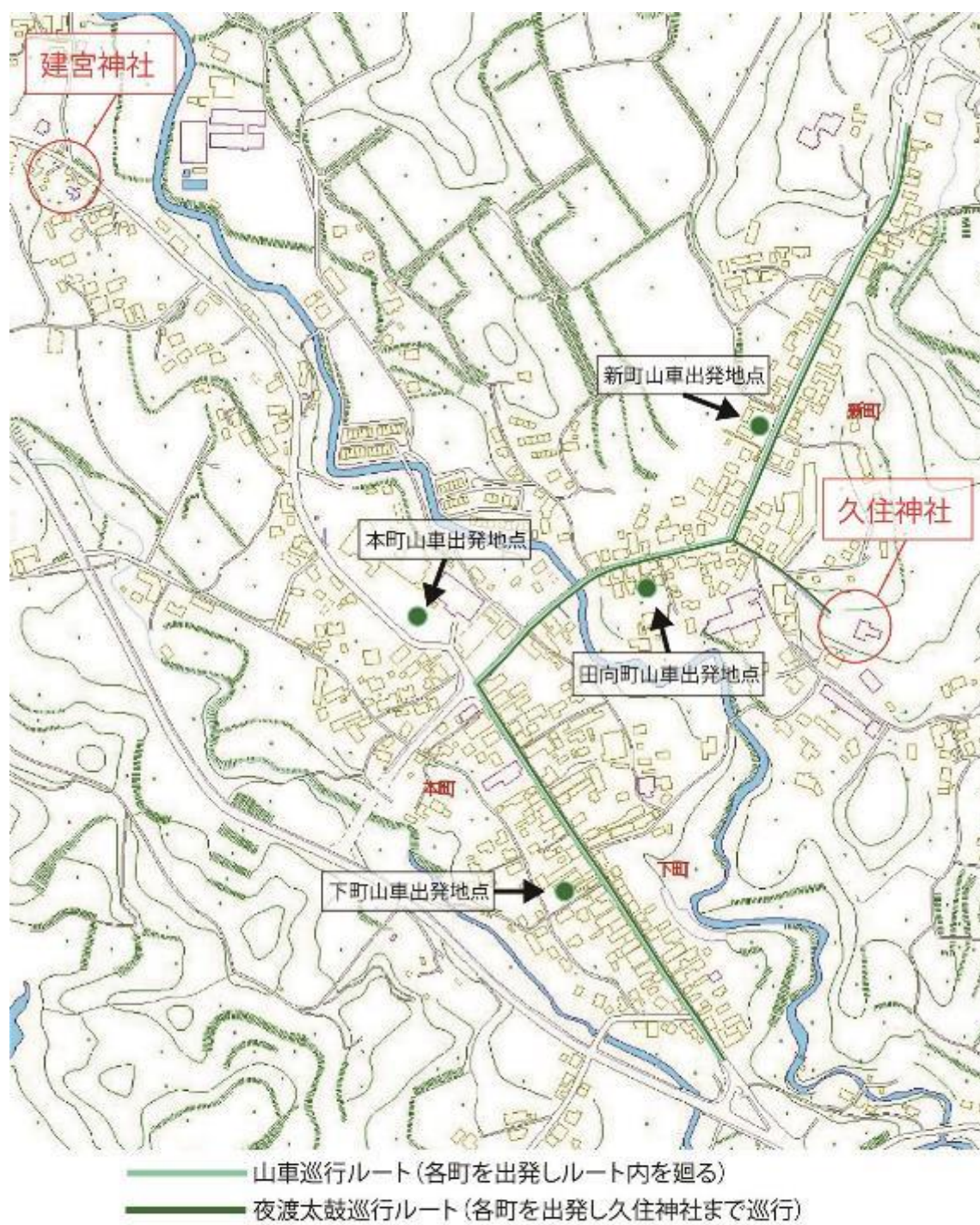
日没後、花火の合図で、本山車4台による曳山行事（市指定無形民俗文化財）が行われる。本山車が巡行する道筋の両側には祭り提灯の灯りと多くの露店が立ち並び、久住町内外から多くの見物客が訪れ賑わいをみせる中、山車囃子の笛・太鼓・鐘の調子に合わせて「ヤマヤレ、元気出させ」の掛け声に合いの手を入れながら、賑やかにゆっくりと町内を練り歩く。祭典が2日間行われていた頃は、2日目に前日作った山車の台だけ残し作り替えた俄山車を2日目の夜披露していた。翌朝、本山車は土台を残し解体される。



本山車巡行（曳山行事）



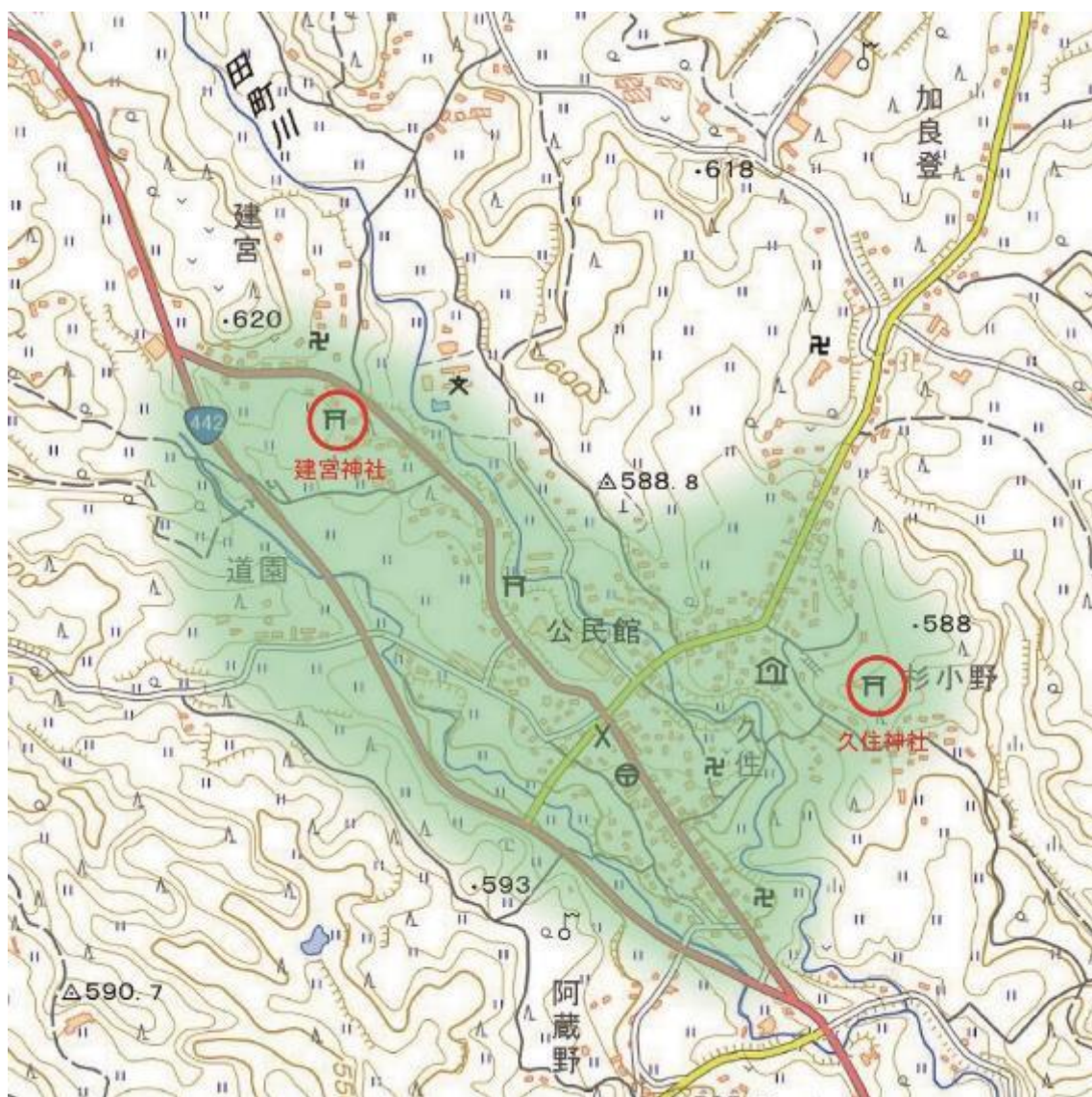
久住夏越祭御神幸ルート図



久住夏越祭関連位置図

④まとめ

久住地域は、江戸時代の肥後藩の久住手永と呼ばれた地域の中心地であり、豊後と肥後を繋ぐ宿場町として栄えてきた。久住夏越祭りは、農村地域の「風除け祭り」であるが、農業を営む人々の平穏無事を祈念することは、商業を営む人々の平穏無事に繋がることから、農商一致した祭りとして、継承されてきた久住町を代表する祭りである。江戸時代から神輿神幸や曳山行事には周辺の農業地域から多くの見物客の訪れ、商業地域に住む人々が曳く山車の「ヤーマヤレ、元氣出せ」の掛け声と山車囃子の音色が、高原の町久住に夏の訪れをつげる風物詩となっている。



久住神社の夏越祭にみる歴史的風致の範囲図

(5) 宮処野神社の神保会行事にみる歴史的風致

①はじめに

宮処野神社の神保会行事が行われる宮処野神社は竹田市北部の竹田市久住町有氏に位置する。この地域は、大船山麓に広がる高原地帯で、古代から朽網郷の中心地として栄えた。江戸時代には七里田温泉に藩の御茶屋が建設され、3代藩主中川久清は大船山に登り軍事訓練を行い、その墓所も大船山の中腹に造られている。都野地区に鎮座する宮処野神社は景行天皇と嵯峨天皇を祀る神社で、10月に神保会行事（県選択無形民俗文化財）が行われる。



田園風景が広がる宮処野神社周辺

②建造物

○宮処野神社（本殿・拝殿・楼門）

神保会行事が行われる宮処野神社は、景行天皇の行宮跡に天皇をお祭りしたことに始まると伝えられている。その後、平安時代に直入擬大領の女が嵯峨天皇の采女となり、上皇崩御の後、故郷来田見に帰り剃髪し、尼となり、恩賜の品を埋めて日夜供養をした。この様子を兄が見て哀れみ、景行宮の傍らに嵯峨の宮を造営し「嵯峨宮様」と呼ばれ、永くこの地方の人々に崇敬され、明治時代になって宮処野神社と改称された。



宮処野神社拝殿

社殿は本殿・拝殿・楼門からなり、本殿は三間社流造、銅版葺、拝殿は桁行3間、梁行3間、入母屋造銅版葺、楼門は三間一戸の入母屋造である。建立年代については明治期以前の建立であると考えられる。

③活動

宮処野神社の秋季大祭である神保会（ジンボエ）は、『豊後国志』（享和3年(1803)完成）の嵯峨明神祠の記述に「建久以来、大友氏世奉祭す。毎歳十月に神馬一疋を供え、朽網氏をして其の事を掌らしむ。名づけて神保会と曰う。」とあり、これが今日の神保会行事の基となった。今日の神保会行事は3基の御輿と3組の獅子組、2組の白熊組で構成される神幸行列が中心の祭礼であり、豊後国志に記述される神保会から変化した祭礼となっている。「弘治三年十月吉日」（1557）の墨書銘のある獅子舞が宮処野神社社殿内から発見されたと大分県無形民俗資料選擇申請書（昭和33年(1958)12月）に記されていること



弘治三年の銘のある獅子頭

から室町時代末期にすでに獅子舞が行われていたと考えられている。また、現在の神幸行列を構成する仏原獅子舞が安政4年（1857）、下河原獅子舞が安政3年（1856）、有氏組白熊が文政12年（1829）に舞の伝授を受けた伝書が残されており、室町期末から江戸期末には、今日の形に近い神保会行事が成立していたといえる。神保会は求婚の場でもあったことから別名「かたげ市」の名でも親しまれ、参道には祭礼市がたって賑わい、神社付近の集落を「市」と呼んでいることから古くから祭の賑わいがあったことがわかる。

神保会行事は、神社総代が参列し神殿にて神事が行われる。神事では、神職による祝詞があり、総代長から順に玉串奉奠を行い、その後神輿へ神を遷座する祝詞が行われる。神事終了後、各獅子舞により、祭が始まることを告げる音入れ（舞調子）が行われ、神輿を担ぐ氏子・神楽・獅子舞・白熊の楽員が片膝を立て参列し本宮神殿横において神職によるお祓いの神事が行われる。お祓いの神事では、神職が五色紙と米が氏子らの頭上に振りかける。すべての神事終了後、神楽の奉納・獅子舞と白熊の起しが行われ、神輿が御発ちする。神輿の御神幸は神幸行列を組み行われる。神幸行列は猿田彦を先導に獅子舞3組（仏原獅子舞・下河原獅子舞・桑畑獅子舞）、白熊（有氏白熊・吉野流白熊）2組、花笠、御輿3基（市・石田・柚柑子の氏子が担ぐ）の順で隊列を組み、本宮から下宮までのどかな田園風景が広がる御神幸ルートを神輿が御下りを行う。下宮に到着後、獅子舞・白熊の納め後に神事・神楽の奉納が行われる。

本来は下宮で1泊し、翌日本宮へ御帰りをしていたが、現在はその日の内に



仏原獅子舞伝書（安政4年）



お祓いの神事の様子



神幸行列



仏原獅子舞



下河原獅子舞



桑畑獅子舞



有氏組白熊



宮処野神社吉野流白熊



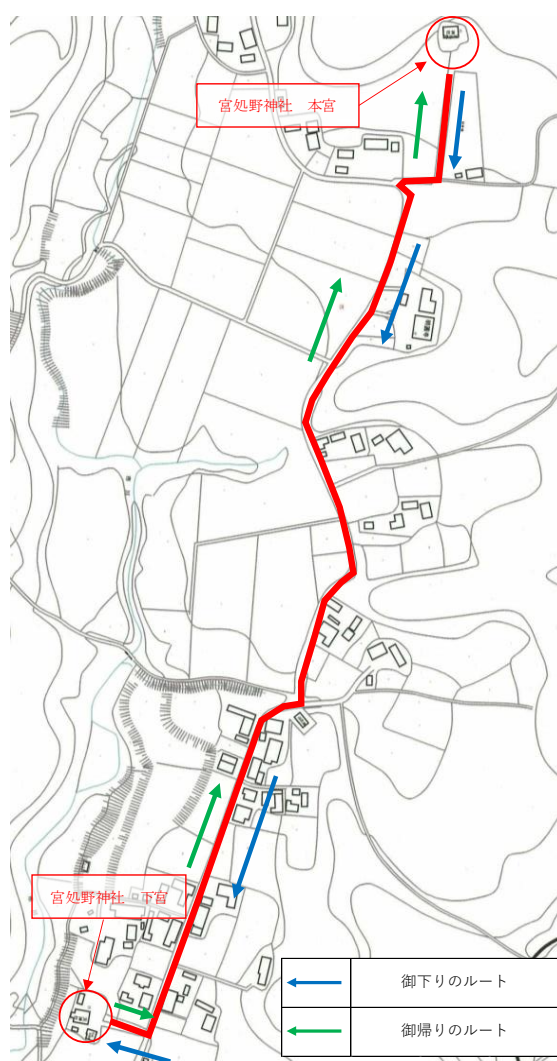
宮処野神楽

本宮への御帰りを行う。御帰りでは、途中にある鳥居で獅子舞の鳥居舞と白熊の鳥居越しが行われるほか、神楽・獅子舞・白熊による各地域への舞込みが行われる。

神輿の本宮到着の時刻になると、本宮参道には、かつては祭礼市が立ち、蜜柑・焼魚・素麺の店や芝居・見世物等が出て大変な賑わいをみせていた。

現在でも参道には多くの露店が立ち並び、氏子や周辺地域の人々が数多く参拝に訪れ賑わいをみせる。

本宮にて神楽の奉納や獅子舞・白熊の納めが行われた後、神事を行い祭が終わる。



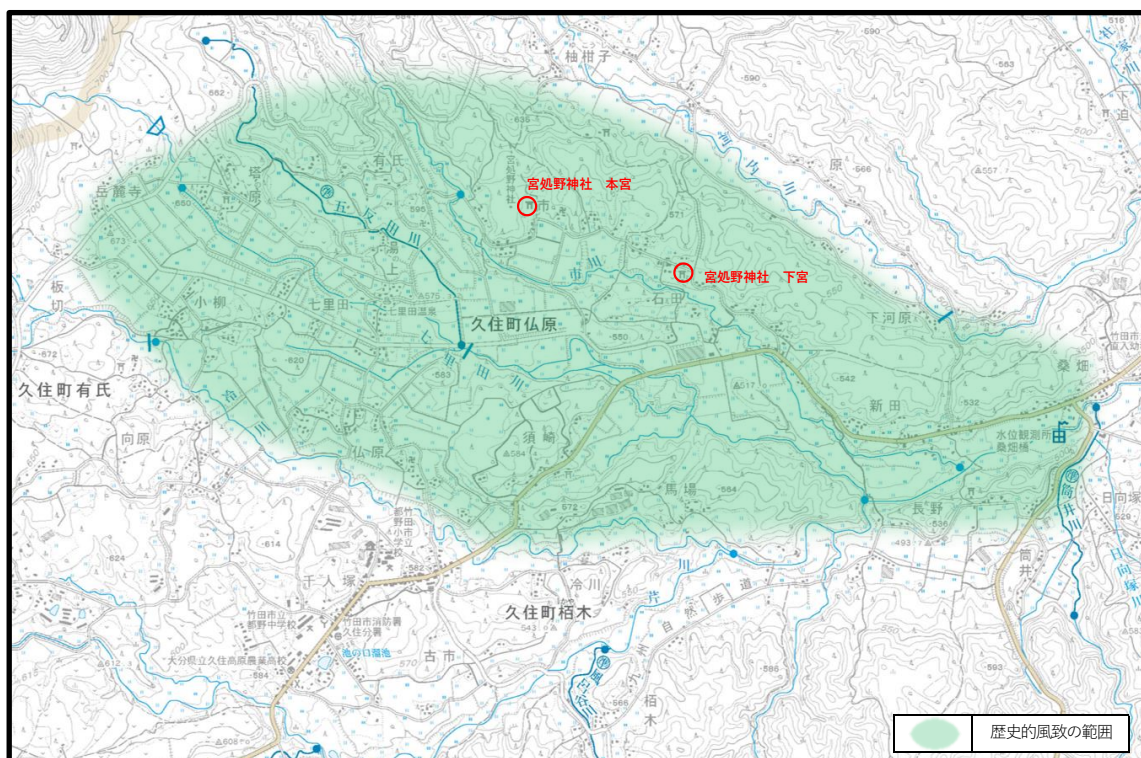
宮処野神社神保会行事 御輿巡幸ルート

④まとめ

宮処野神社周辺は農村地域であり、近世以降、神保会行事では祭礼市が立ち賑わいをみせ、朽網地域全域から祭への参加や見物に多くの人々が集まっていた。

今日でも地元を離れた若者が神保会行事に合わせ帰郷し、日頃のはのどかな田園風景おおのほりの広がるこの地域に祭りの開催を知らせる氏子により奉納された大幟が沿道に建ち並ぶ。

神楽や獅子舞の調子と白熊の唄声による賑わいの中を華やかな御神幸行列が整然とした姿で進んでいく様子は、往時から大切に受け継がれてきた人々の営みであり、中世期「朽網」と呼ばれていた地域の繁栄が垣間見ることができる神保会行事は、この地域固有の歴史的風致である。



宮処野神社の神保会行事にみる歴史的風致の範囲図

（６）長湯温泉の温泉供養にみる歴史的風致

①はじめに

「温泉供養」の行われる湯原天満社・湯原薬師堂は竹田市直入町長湯に所在する。長湯地域は、古くから温泉地と知られており、『豊後風土記』（奈良時代初期）にも記されている。室町時代には朽網郷の領主である朽網氏の管理下に置かれていたことが文献に記されている。江戸時代になると岡藩により湯屋や御茶屋が建設され、長湯温泉は湯治場として整備され、岡藩歴代藩主や幕府からの巡見使も湯治に訪れるほか、藩士の湯治も認めており、藩営保養所とも言える二の宿、三の宿も建てられていた。現在の長湯温泉は、温泉旅館・共同浴場・公営浴場が立ち並び、温泉街を流れる芹川へ流れ込む温泉の湯と鍾乳石のように堆積した湯とじ（湯あか）が奥豊後の小さな温泉町長湯の情緒を醸し出してる。

長湯温泉（湯原温泉）にある湯原薬師堂には、温泉の守護神である薬師如来と地蔵菩薩が安置されており、湯原薬師堂・湯原天満社では、温泉による諸病退散を祈願した温泉供養が行われる。



芹川沿いに温泉旅館が並ぶ長湯温泉

②建造物

○湯原天満社

湯原天満社は明治 17 年（1887）に、周辺の 5 社を合祀し創建された。その後、社殿が腐朽したため、大正 9 年（1920）に岡藩の御茶屋跡である現在地に新築された。

社殿は拝殿と神殿からなり、拝殿は桁行 2 間梁行 3 間の木造入母屋造り銅板葺、神殿は桁行 1 間梁行 2 間の木造社流造銅板葺りの建物である。



湯原天満社拝殿

○湯原薬師堂

湯原薬師堂は湯原天満社の境内の片隅にある薬師堂。

岡藩六代藩主中川久通に見初められ京都よりこの地に移り住んだ陽光院が胃腸病を患い、苦しんでいたところ、薬師如来と地蔵菩薩が現れ湯ノ原の温泉で治療すれば治る



湯原薬師堂

と告げられ、全快したことから、薬師如来と地蔵菩薩（市指定有形文化財）を祀ったことが由来とされる。現在の薬師堂は昭和 11 年(1936)に建て替えられたもので、桁行梁行ともに 1 間、入母屋造、木造銅板葺の建物である。



湯原薬師堂の薬師如来と地蔵菩薩

③活動

温泉供養は、温泉による諸病退散等を祈願するために毎年 4 月と 8 月に行われる。

その起源は、『直入町史』（1984）によると薬師如来像・地蔵菩薩像の開眼供養が行われた正徳元年（1711）8 月に求めることができる。

この温泉供養にあたり、薬師如来像と地蔵菩薩の「湯あみ」行事が行われてきた、温泉の守護神である二尊を清めるために湯浴みさせる行事で、二尊の湯浴み後に入浴すると一段と効能があるといわれる。

また、二尊に奉納された温泉の湯を飲むと特に温泉の効能があるとされ、祭当日は温泉を汲んで飲む人が後を絶たない。

近年は二尊が砂岩質の石像で傷みが出てきたため「湯あみ」については中止しており温泉の湯を奉納し、法要が行われている。

温泉供養では、長湯温泉の各温泉が温泉の湯を一升瓶に酌み、湯原薬師堂に奉納を行う。

湯原薬師堂では地域住民や温泉関係者が参列し、温浄寺の住職による法要が行われる。

同時に湯原天満社においても神事が行われる。



湯原薬師堂に温泉を供える



湯原薬師堂での法要



湯原天満社での神事

神事が終わると神輿が天満社を発ち、薬師堂へ参拝を行い、湯原橋を渡り温泉旅館や商店が立ち並ぶ長湯温泉街を巡幸する。

湯原薬師堂での法要が終わると供えられた温泉水は各温泉へ持ち帰られ、それぞれの温泉へ戻される。

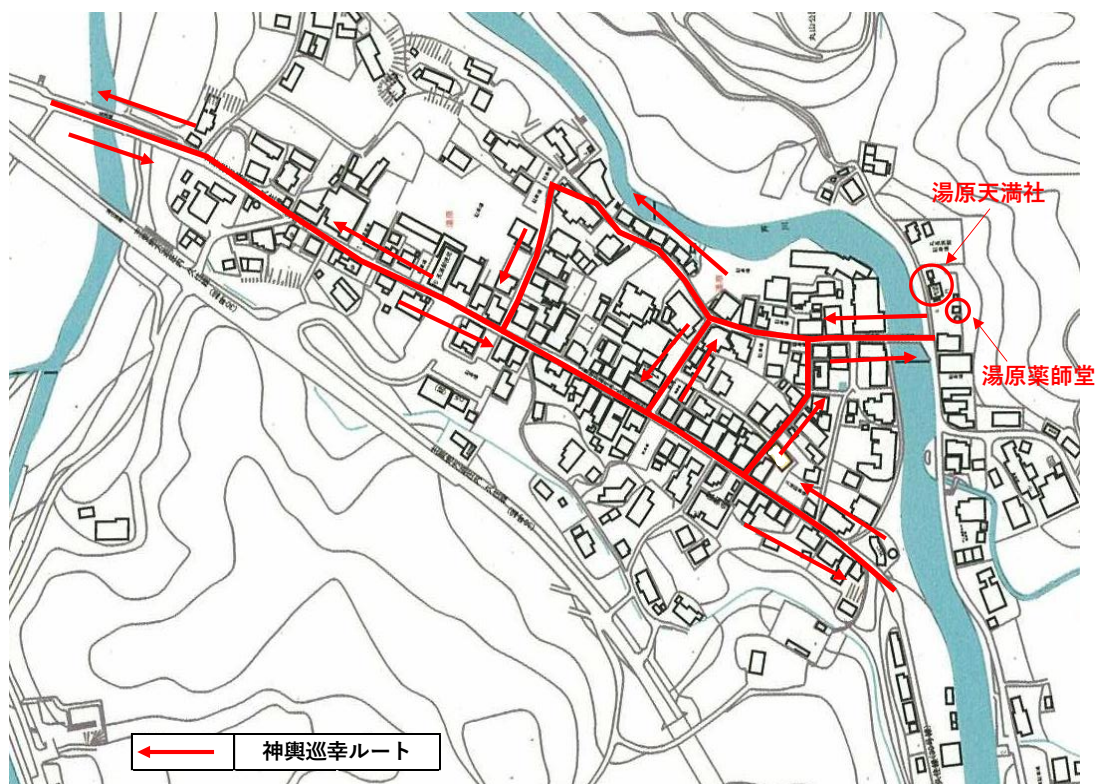
湯原天満社では神楽が奉納され、長湯温泉の湯治客や地元民が見物に訪れる賑わいをみせる。



湯原天満社での神楽奉納



神輿巡幸の様子



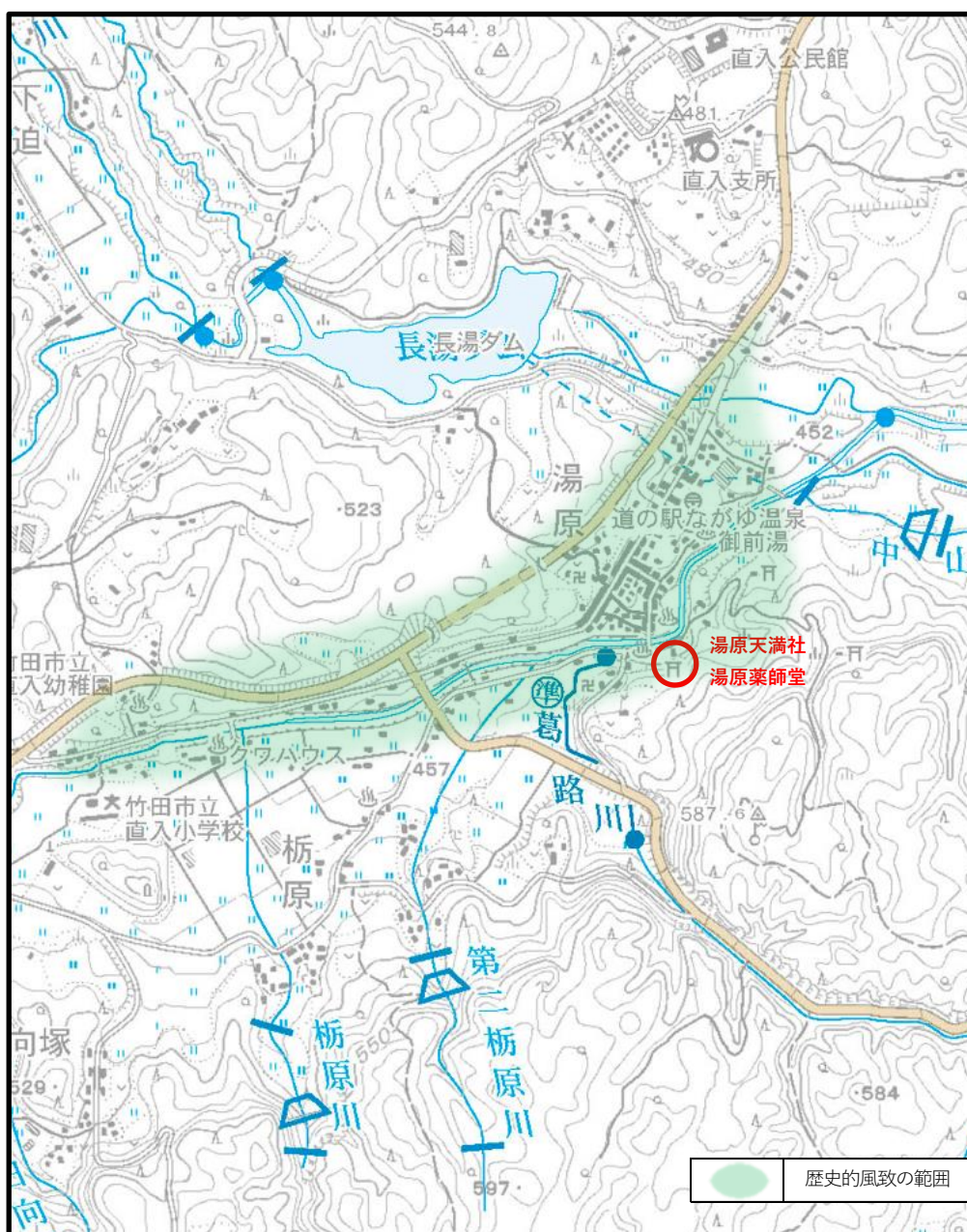
温泉供養神輿巡幸ルート

④まとめ

歴代岡藩主や藩士の湯治場として利用されてきた長湯温泉は、山々に囲まれ芹川沿いに温泉旅館が立ち並ぶ情緒豊かな温泉郷であり、そこに住む住人は古くから温泉と供に暮らしてきた。

長湯温泉の守護神である湯原薬師堂の二尊を供養する温泉供養では、各温泉が温泉の湯を湯原薬師堂にお供えし、法要を行い、温泉街では神輿が賑やかに巡行し、住民や湯治客は沿道で歓声をあげるなどして賑やかに見物している。

長湯温泉の発展とそこで生活をする住民が温泉へ感謝する行事として続けられている温泉供養は、湯治場長湯を象徴する歴史的風致として延々と続けられている。



長湯温泉の温泉供養にみる歴史的風致の範囲図

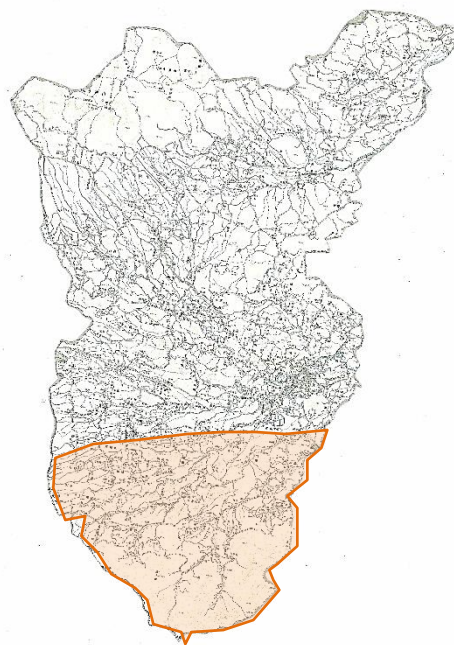
（７）農業水利施設の維持にみる歴史的風致

①はじめに

竹田市南部地区（入田・^{にゅう た} 姫岳・^{うばだけ} 宮砥・^{みや ど} 柏原地区）は、祖母山系の山々が作り出す険しい山地と大野川水系の河川浸食により谷部が形成され、山地、山麓緩斜面、谷部、谷底平野の連続による地形を呈する。祖母山系の山地を河川が浸食し形成された多くの溪谷、大野川の源流をなす湧水が各所に見られ、特別天然記念物カモシカ、県指定天然記念物イワメ、市指定天然記念物神原のトチなど数多くの希少生植物が生息する自然豊かな地域でもある。また、竹田市南部地区は水利条件の悪い狭小な谷底平野と山麓緩斜面を利用した棚田による農地が点在し、江戸時代後期以降それらの農地に莫大な労力を投じて農業水利施設の整備が行われてきた。それらの農業水利施設は現在まで地域住民により維持管理が行われ、かわらず多くの水田へ農業用水を供給している。また、谷筋に展開する農村地帯では豊作を祈願する祭が各所で行われ、祭に奉納される神楽・獅子舞・白熊が数多く伝承されているなど、棚田や井路等の農村風景と豊作を祈願する民俗芸能がこの地域の景観を作り出している。

大野川の源流地帯である竹田市域は、支流の小河川がほぼ西から東に向かって流れ、古くから流域の人々の生活に利用されてきた。しかし、急峻な地形を呈するこの地域の河川は川底が深く落ち込み、水の利用は予想外に難しく、古くから水路を設けて導水する井手灌漑や水を貯めて利用する溜池灌漑が行われてきた。

古い時代の水田は、谷間や谷の出口で湧水が豊富な場所で行われ、水利は谷川の水を小さな堰でせき止めて流し込む方法がとられていたが、水田の開発が進むと、遠くの水源から水路で水を導く方法に変わり、大規模な井堰工事が進められた。江戸時代の初期、岡藩3代藩主中川久清が岡山から熊沢蕃山を招き、その指導で灌漑水利事業が進んだとされる。蕃山の指導で行われた水利事業には、緒方井路と城原井路が知られている。このように竹田地域には江戸時代から数多くの農業水利施設が整備され、特に標高差のある山間地に開かれた水路の開発



南部地区の位置



南部地区の棚田

は、山地の傾斜地に階段状の水田である「棚田」が開かれるようになった。

このような水路は市内全域に見ることができ、音無井路^{おとなしいろ}、富士緒井路^{ふじおいろ}、明正井路^{めいせい}、神原井路^{こうばるいろ}などがある市の南部と城原井路^{めいじおかもといろ}、明治岡本井路などがある北部の山間地域において数多く残されている。

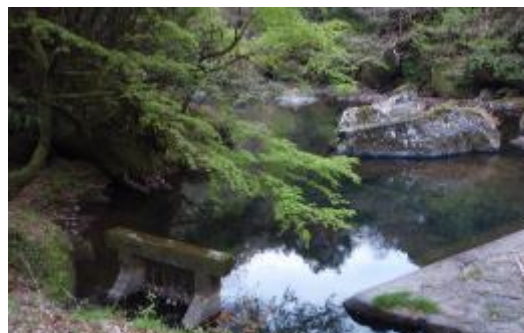
②建造物

○音無井路

音無井路は、竹田市の南部宮砥地区に所在し、大野川の上流大谷川から取水する井路で、元禄6年（1693）に岡藩士須賀勘助^{すが かんすけ}が音無井路を開削すれば有益であることを藩主に上陳し、許可を得て開削に着手し、大方の完成をみたが、洪水のために施設が大破し、復旧のめどが立たず、勘助は割腹したと伝えられる。その後、寛保3年（1743）、文化年間（1804～1818）、天保7年（1836）、文久2年（1862）に復旧の計画が立てられたが、資金面等の問題から実現されなかった。明治期に再び井路復旧の協議が行われ、明治14年（1881）年に大分県から建設の許可を受け、明治17年（1884）に工事着手し、明治29年（1896）に幹線及び3支線が竣工した。その後、水不足解消のため大谷ダム（昭和5年（1930）着工～昭和20年（1945）竣工）を建設し、幹線からの用水の3つの支線に適切に配分するため、直径6.42mの円形の分水である12号分水（円形分水）が昭和9年（1934）に造られた。12号分水は、頭首工から約2100m続く暗渠を抜けた位置に作られている。建設当初は石積み構造であったが、昭和59年（1984）にコンクリート製に改修された。形状は直径6.4m円形を呈した升状の分水施設で、円形の升の壁面に12か所の窓が開けられ、窓の数を調節することで面積に応じ水を均等に分ける施設である。12号分水



音無井路 12 号分水



音無井路頭首工



音無井路 2 号暗渠入口



音無井路記念碑

の名前の由来は窓が12口あることからつけられたともいわれる。音無井路は総延長17km、受益面積90haを有する。昭和51年(1976)には井路開削の苦労を後世に伝える音無井路記念碑が井路の傍らに建立された。

○明正井路

記念碑によると、明正井路は大正13年(1924)に竣工した竹田市入田地区の緒方川から取水し、豊後大野市まで続く、総延長175kmに及ぶ長大な灌漑用井路である、トンネルと橋による導水部分が多く、大小17基の水路橋が建設され、石造アーチ水路橋が14基現存している。最も規模が大きい明正井路第一拱石橋は、大正8年(1919)に完成した、橋長約78mの6連のアーチを有する水路橋である。



明正井路第一拱石橋

○富士緒井路

(白水溜池堰堤水利施設は重要文化財)

富士緒井路は、大正13年(1924)に竣工した、竹田市と豊後大野市を受益地に持つ総延長15kmの幹線水路を持つ水路。昭和13年(1938)に水量確保のため竣工された白水溜池堰堤施設(重要文化財)は、越流式コンクリート重力ダムで構造物を地形に対応して的確に構築したことにより類い稀な流水美を現出させており、技術上かつ造形上の価値が認められ、平成11年(1999)に重要文化財に指定されている。



白水溜池堰堤水利施設

これらの施設は南部地区における代表的な農業水利施設であり、現役の農業施設であるのみでなく観光資源として多くの観光客が訪れている。

③活動

農業用水利施設の多くは江戸時代から昭和初期に建設されたものが多く、建設当初から、受益者である地域の住民の手により維持管理が行われてきた。水路の受益者は資金面や維持管理を行う水利組合（土地改良区）等をつくり、総会などを通じて年間の活動を決定し維持管理活動を行っており、音無井路でも明治26年(1893)に音無井路普通水利組合が設置され、井路の管理運営を行ってきた。平成14年(2002)には、音無井路普通水利組合を含む竹田市内の14の改良区（水利組合）が合併し竹田市土地改良区として施設の維持管理が適切に行えるよう組織運営基盤を強化し現在維持管理を行っている。井路の維持管理に関する年間活動計画等は、3月の総会や理事会で決定され、各組合員に周知される。音無井路土地改良区所有の文書類によると、主要幹線の維持管理活動は、鍬やスコップを手にした組合員が井路に集まり、「井手さらえ」と呼ばれる水路内の砂礫されきの除去作業が、田植えの準備が始まる3月に組合員総出で行われる。7月ころには、井路の沿線に生い茂る雑草の除草作業等を実施し、円滑な用水の供給を行う。また、ごみ等の除去は改良区用排水係8名により、また支線の維持についても折々に受益者が手入れをする様子が見られる。

また、音無井路では、毎年春の清掃時に12号分水の傍らにある水恩碑すいおんさいの前で「水恩祭」を実施している。水恩祭では土地改良区の役員が12号分水の傍らにある水恩碑の前に整然とした様子で立ち並び神事が行われる。神事は神職による祝詞が行われ、土地改良区の役員による玉串奉奠を行う。その後、神職が12号分水に向かい、お祓いが行われる。水恩祭は井路竣工当初から続けられ、水路暗渠の掘削は途方もない難工事であり、起伏の激しい当地域の田畑に用水を流すことは古くから農



組合員による音無井路幹線の清掃作業の様子



幹線の除草作業の様子①



幹線の除草作業の様子②

民の悲願であり、その悲願達成のために失われた尊い命がある。水恩祭りは、水に対する畏敬の念と先人の流した血涙に対する感謝の気持ちを表現したものである。



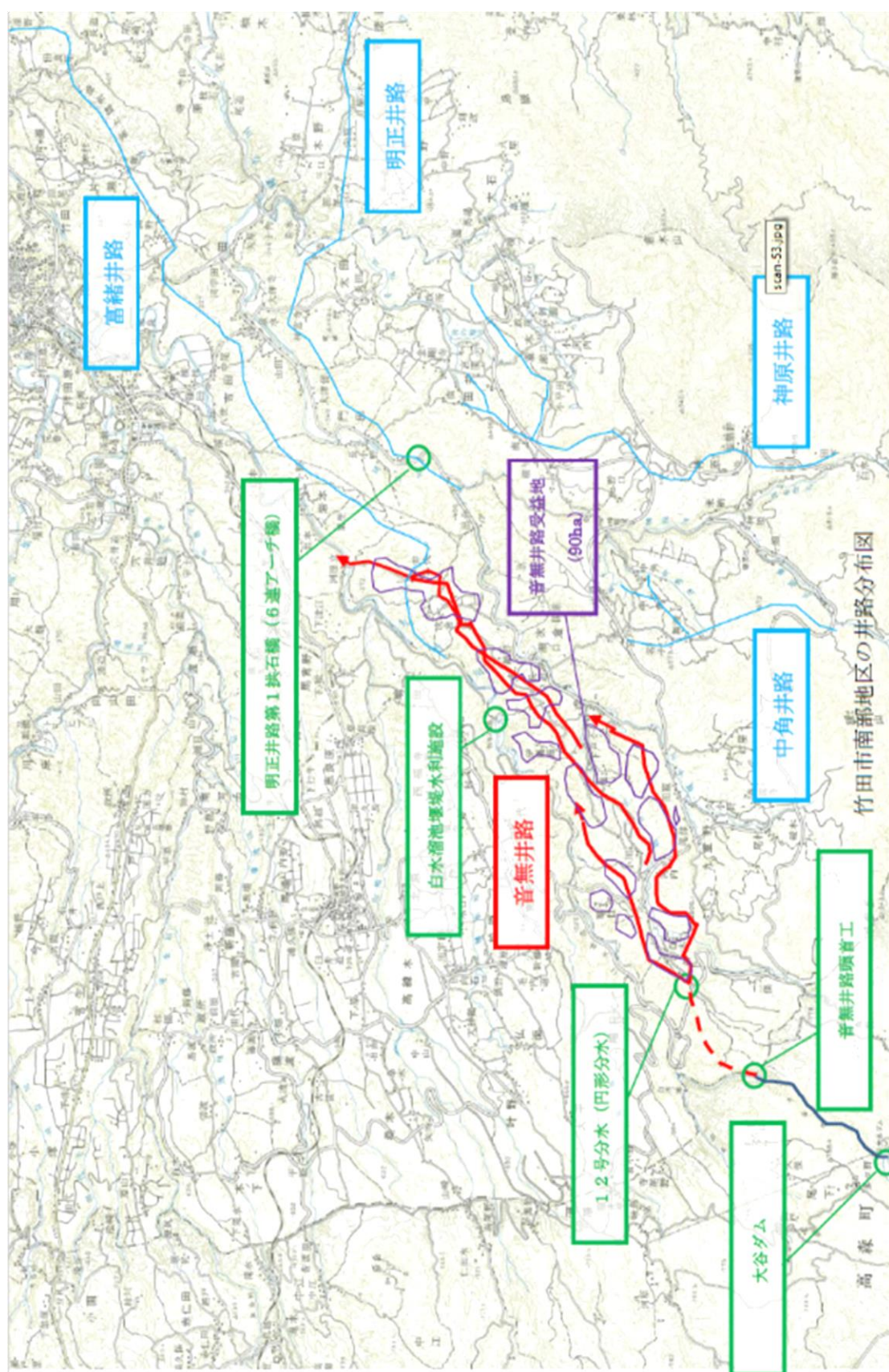
音無井路水恩碑



音無井路水恩祭（役員が立ち並び神職による祝詞奏上の様子）



12 号分水でのお祓いの様子

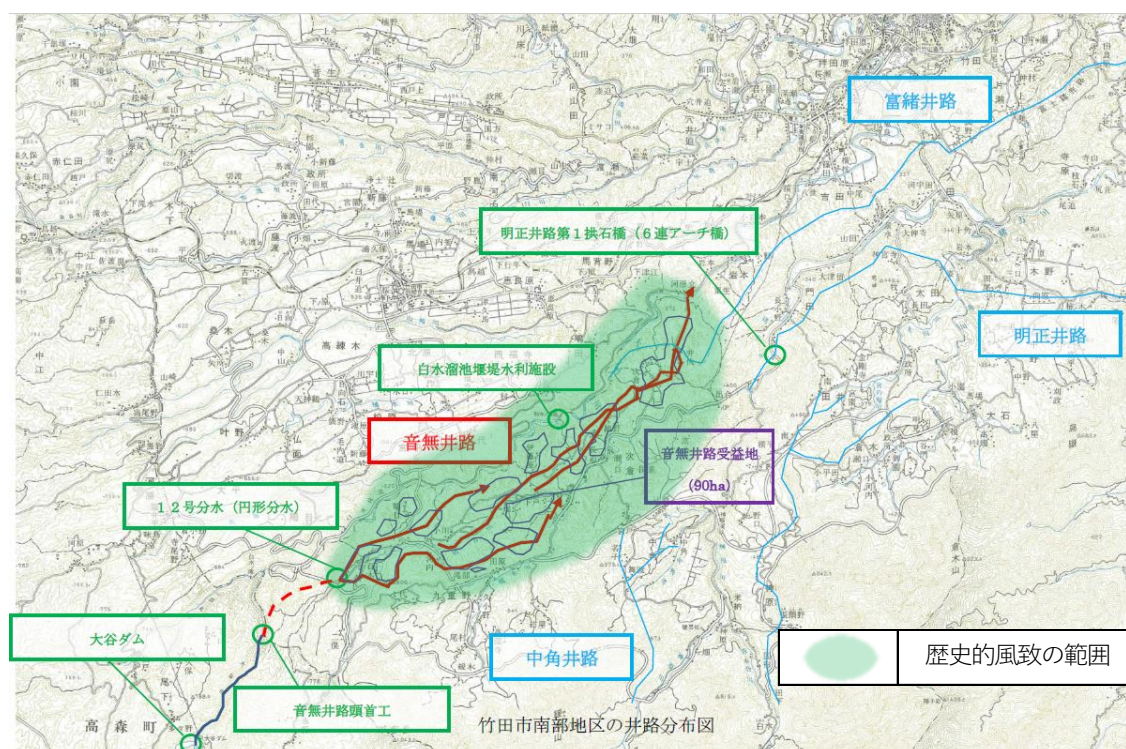


④まとめ

中山間地域の谷間に農地が展開する竹田市南部地域は、農業用水の確保が近世以降盛んに進められた。音無井路をはじめとする農業水利施設の建設は、地域の耕作面積が増え、生産性は格段に伸び、住民の生活を豊かにしていった。

水路開削により恩恵をうける受益者は水路維持のために組合を組織し、年2回行われる水路清掃では、受益者総出により頭首工から末端まで山中を走る主要幹線沿いを点検し、水路内に溜まった砂礫やごみ、水路を覆う雑草を丁寧に除去する。

また、毎年春に行われる水恩祭では、水恩碑に祭壇を設け神事を行い、水と先人に感謝の念を表す活動が続けられている。このように、受益者による水路の維持活動は、竹田市南部地域固有にみられる歴史的風致であり、祖母山麓の起伏の激しい谷部の斜面に広がる棚田と山あいには点在する集落が維持され、竹田市に古くから見られる農村の原風景が醸し出される歴史的風致である。



農業水利施設の維持にみる歴史的風致の範囲図

(8) 岡城桜まつりにみる歴史的風致

①はじめに

岡城桜まつりの舞台となる岡城跡と竹田城下町は、文禄3年(1594)に初代岡藩主中川秀成なかがわひでしげの豊後岡入部により近世城郭と城下町として整備された。その城と城下は江戸時代の奥豊後における政治・経済・文化の中心地として栄えてきた。

明治時代になり岡城は廃城令により取り壊されたが、城下町には現在も城下町建設当時の町割りが残され、国指定の史跡旧竹田荘や重要文化財願成院本堂、国の登録有形文化財の佐藤家住宅、吉川家住宅、塩屋土蔵など歴史的な建造物を数多く見ることができる。



岡城跡と桜

②建造物

○岡城跡 (国の史跡)

岡城跡は、稲葉川いなばがわと白滝川しらたきがわの二つの川に挟まれた阿蘇溶結凝灰岩の台地上に形成された中世の山城の形態を近世にまで残している特異な城郭である。岡城の築城は、文治元年(1185)に緒方三郎惟栄おがたさぶろうこれよしが源義経を迎えるために設けたとされるが、今日の史跡岡城跡の前身となる城は、応安2年(1369)頃以降に志賀氏の居城として築城されたと考えられている。

『幕末維新时期撰定 中川氏御年譜第三』(江戸時代末期)によると、現存する岡城跡は、文禄3年(1594)に「岡城普請始ル」、慶長元年(1598)に「岡城御普請成就」と記されている。この間に中川氏が大々的に改修普請を行い、志賀氏時代に中世の山城であった岡城は、壮大な石垣が築かれた近世城郭として形が整えられた。

明治維新後に城郭は取り壊され荒廃していたが、本丸・二の丸・三の丸からなる城の主郭



『幕末維新时期撰定 中川氏御年譜』



岡城普請始ル『幕末維新时期撰定
中川氏御年譜第三』

部、城郭の西側に築かれた西の丸及び家老屋敷、東側に藩主の祖先を祀るびょうじょ廟所のほか、大手門おおてもん・近戸門ちかどかど・下原門しもはるもん・清水門しみずもんの4つの門などの石垣は現在もなお残され、昭和11年(1936)には国の史跡に指定されている。

戦後は、瀧廉太郎作曲「荒城の月」のモデルとなった城跡として、桜の名所として知られるようになり、城内に瀧廉太郎像(二の丸跡)、荒城の月歌碑(本丸跡)が建立されたほか、桜の植樹が市民の手により行われ、春の桜と秋の紅葉の

時期には、多くの見物客で賑わう竹田市を代表する観光地となっている。

○塩屋土蔵

主屋・中蔵・古蔵(国の登録有形文化財)

塩屋土蔵は主屋・中蔵・古蔵から構成され、主屋は棟札から元治2年(1865)の建築とわかり、構造は土蔵造^{さんかわらぶき}棧瓦葺の2階建の妻入の建物で、屋根構造は正面入母屋造^{いりもや}、背面切妻造^{きりつまづくり}となっている。中蔵は、主屋の後方に建つ土蔵造の建物で、建築年代は江戸時代末、屋根は切妻造で棧瓦葺、平入の階建土蔵であり、主屋と連続して商家の佇まいを構成している。古蔵は中蔵後方に建つ土蔵造の建物で、建築年代は江戸時代末、切妻造棧瓦葺の平入の2階建土蔵。

○佐藤家住宅

主屋・旧店舗兼主屋・旧味噌蔵・土蔵(国の登録有形文化財)

佐藤家住宅は、主屋・旧店舗兼主屋・旧味噌蔵・土蔵から構成され、主屋は明治12年(1879)に建築された木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物。旧店舗兼主屋は、明治12年に建築された木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物。旧味噌蔵は、明治12年に建築された木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物。土蔵は、明治12年頃に建築された土蔵造2階建、切妻造棧瓦葺の建物。

○吉川家住宅

主屋・土蔵・倉庫一・倉庫二・倉庫三(国の登録有形文化財)

吉川家住宅は、主屋・土蔵・倉庫一・倉庫二・倉庫三から構成され、主屋は大正10年(1921)に建築された、木造2階建、入母屋造棧瓦葺の建物である。土蔵は、明治11年(1878)に建築された土蔵造2階建、切妻造棧瓦葺の建物。倉庫一は、明治11年に建築された土蔵造2階建、切妻造棧瓦葺の建物で、かつては「酒造所」の酒蔵として使用されていた大規模な土蔵である。倉庫二は、倉庫一の背後に建つ木造2階建、棧瓦葺の建物で、内部は米を蒸すための「釜場」や「洗米所」、酒造り職人の「休憩所」として使用されていた。倉庫三は、木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物で、「室(麴室)」と使用されていた。

○旧竹屋書店

店舗兼主屋と土蔵(国の登録有形文化財)

旧竹屋書店は、店舗兼主屋と土蔵から構成され、店舗兼主屋は明治32年(1899)に建築された、木造2階建、切妻造棧瓦葺の建物である。土蔵は、明治中期建築の土蔵造平屋建、切妻造棧瓦葺の建物。

○古田家中間長屋門

古田家中間長屋門は、弘化4年(1847)建築(棟札あり)の切妻造棧瓦葺の武家屋敷の長屋門である。

③活動

「岡城桜まつり」は、昭和22年（1947）に火災により殆ど焼失した竹田町の中心部の復興の祝いに、昭和23年（1948）に岡城の桜の時季にあわせ、春の祭りとして、商工会と町が共催で行った「たけだ祭」がそのはじまりである。この祭りは恒例となり、毎年春の祭りとして行われるようになった。祭りの様子は昭和23年（1948）4月6日の大分合同新聞に「岡城跡には遠近から押し寄せた人々で空前のにぎわいだった」と掲載されている。

「たけだ祭」として開催された祭りは、「竹田春まつり」や「竹田桜まつり」等と名称を変えながら、昭和42年（1967）からは、「岡城桜まつり」の名称となり現在まで継続して開催されている。

また、竹田市は作曲家瀧廉太郎ゆかりの地であり、名曲「荒城の月」は幼少期を竹田で過ごした瀧廉太郎が、岡城の情景をイメージし作曲されたとされる。桜まつりで岡城跡を訪れる花見の客は、二の丸跡の瀧廉太郎像、本丸跡の荒城の月歌碑を訪れ、その中には「荒城の月」を口ずさむ人や合唱を行う人たちもみられた。多くの市民は岡城跡と荒城の月と桜のイメージを大切にしており、市民の手により城内に多くの桜が植樹をされ、桜の名所岡城跡の礎となった。

昭和23年の「たけだ祭」は3日間開催され、祭りでは、花行列、町内組合の山車競演、仮装行列などの催しが行われた。（昭和23年4月1日大分合同新聞）祭りの開催日数や催しの内容は年ごとに変化し、近年は4月の第1日曜日の開催となっている。

催しでは、昭和30年代から昭和40年代、岡城内にはボンボリが灯され、各商店は造花の桜や万国旗、「祝桜まつり」のビラを軒に下げ祭りを盛り上げ、舞踊の練り歩きや神楽の奉納、仮装行列やのど自慢大会などが、岡城跡と城下町一円で行われ、岡城跡本丸には座り場が無いほどの花見客が訪れていた。この頃には、岡城跡は大分県内有数の花見の名所となり、市民により岡城跡への桜の植樹が盛んに行われた。

昭和40年代後半になると、岡城桜まつりは催しが少なく魅力がないと批判されるようになり、昭和49年（1974）には、商工会議所青年部により大名行列



昭和23年のたけだ祭（軒先に花飾）



岡城跡での花見（二の丸）



大名行列の様子（昭和50年代）



駕籠かきレース（昭和50年代）

や駕籠かきレースなどの新しい催しが行われるようになった。特に大名行列は、さくらまつのメイン行事となり現在もなお続く行事として受け継がれている。

当初の大名行列は、60名ほどで構成され、岡藩主を中心に警護侍、奴、鉄砲組や弓組などを従え、豊後竹田駅前の西光寺を出発し城下町を通過し、岡城跡まで練り歩くコースで実施されたが、その後豊後竹田駅周辺を出発し、城下町から岡城跡を往復するコースとなった。近年は岡城跡を出発し城下町を巡り、豊後竹田駅周辺までのコースとなっている。行列は、先導侍の「下に～、下に」の

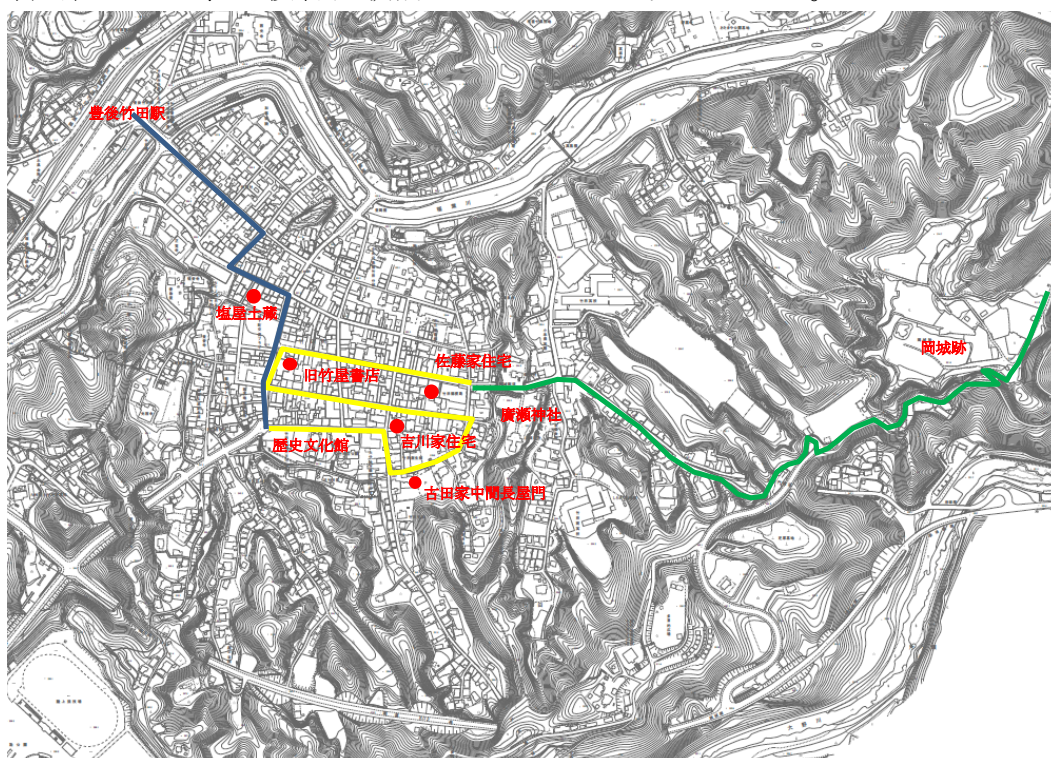


大名行列の様子（令和5年）

掛け声で進み、岡城内や城下町の観覧客の多い主要な個所では、奴頭による「コリャサー」「ヒサヨー」の号令に、奴が「オー」掛け声をあげ、挟み箱と毛槍の投げ渡しが行われる。令和5年の大名行列は、高張提灯を持つ中間を先頭に、先導侍、警護侍（槍組・弓組・鉄砲組、近習侍、道中奉行、弓頭、奴頭、奴、城主、小姓、御典医、茶坊主、家老、お陸尺、籠方、目付、茶弁当、長持、押奉行など総勢95名の行列で行われ、岡城跡を出発し、城下町（廣瀬神社→田町→上町→殿町→歴史文化館→本町→下本町→構口→古町）を巡り、豊後竹田駅前までのコースで実施された。



瀧廉太郎像



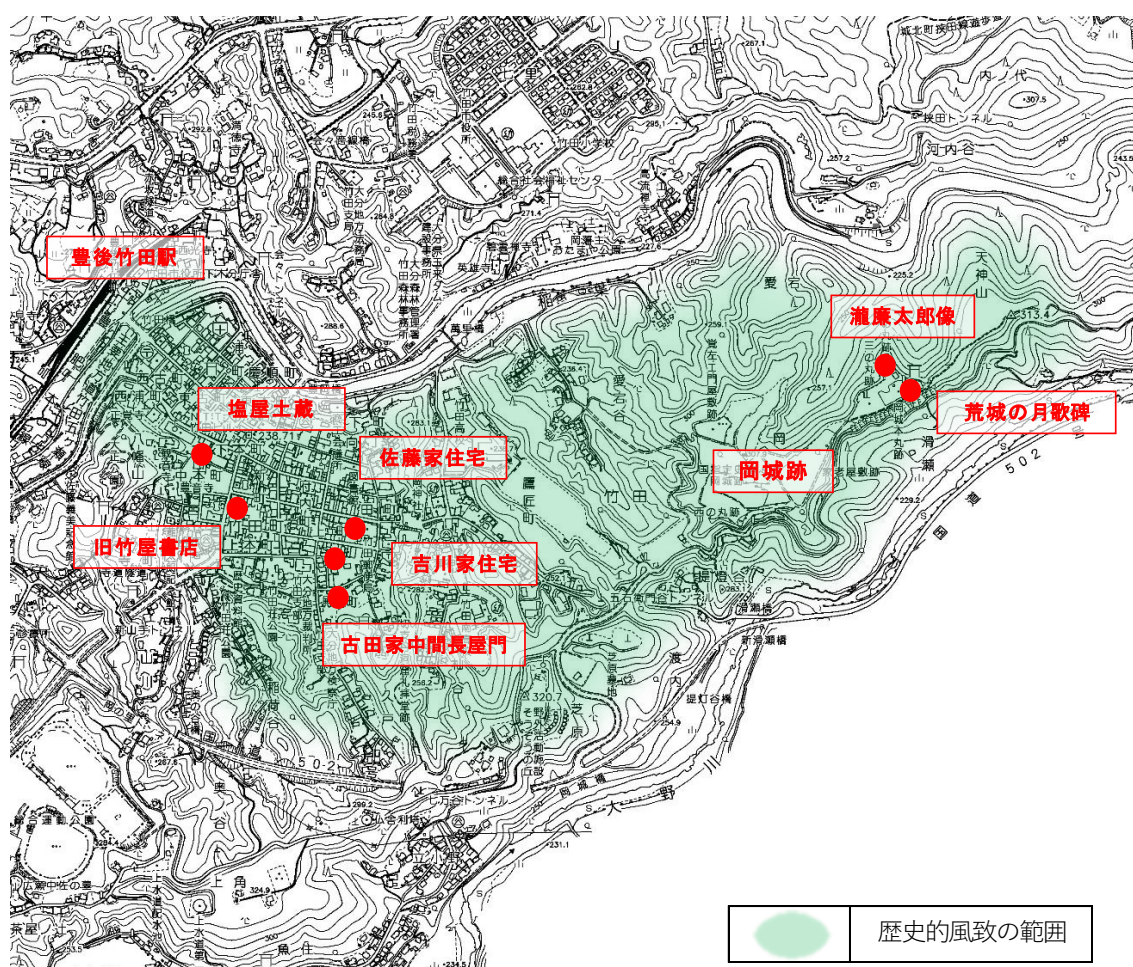
令和5年の大名行列のルート

（ — 岡城跡→廣瀬神社 — 廣瀬神社→歴史文化館 — 歴史文化館→豊後竹田駅）

④まとめ

城下町の火災からの復興を祝って始められた岡城桜まつりは、市内外から多くの花見客が訪れるようになり、城下町の振興、賑わいを創出する催しとなった。

また、明治時代、廃城となり荒れ果てた岡城跡を見たイメージで作曲された「荒城の月」の歌詞にある「春高樓の花の宴」の様子を訪れる花見客は想像し、往時の様子を彷彿とさせる祭の大名行列は、江戸時代の情緒の残る城跡と城下町をつなぐ行事となり、岡城跡の石垣を背景に「下に～、下に」の号令のもと、城下町へと進む行列と、それを取り囲む桜見物の人々の様は、竹田城下町に春の訪れをつげる歴史的風致となっている。



岡城跡と岡城桜まつりにみる歴史的風致の範囲